

彦根市埋蔵文化財調査報告 第12集

# 古屋敷遺跡発掘調査概要報告書

彦根犬上広域廃棄物投棄場新設に伴なう

昭和62年3月

彦根市教育委員会

# 序

現代における生活環境の変化は、今まで不变と思われていた大地をも変えつつあります。この様な中で、大地に刻まれた人々の生活の跡を知るれとは、私たちのくらしの歴史を知るだけでなく、未来の予測をも可能にしてくれます。このような意味からも、私たちの祖先が永い歳月のなかで人々がどのように生き何をつくりあげてきたかを知ることは重要な課題であると言えましょう。

古屋敷遺跡は中世後期の集落跡であり、この集落跡をある程度のまとまりをもって調査を実施することができました。このことは、書かれた歴史だけであったこの時代の生活跡に直接手をふれる事が可能になったと言えるでしょう。彦根城築城以前に、この地にどのような歴史があり、どのような生活があったのかを知る上で貴重な資料であると考えます。

本書が、この時代の研究や文化財の保護を進める上での資料になれば幸いです。

文末にはなりましたが、古屋敷遺跡の発掘調査に御協力・御助力下さいました彦根大上広域廃棄物投棄場管理組合をはじめ多くの方々に対し厚く御礼を申し上げます。

昭和62年3月

彦根市教育委員会  
教育長 河原保男

## 例　　言

1. 本書は、滋賀県彦根市日夏町 4545-1 番地他に所在する古屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、彦根大上広域廃棄物投棄場新設に伴ない彦根大上広域廃棄物投棄場管理組合の委託を受け、彦根市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和59・60年度事業として現地調査を実施し、その後資料の整理作業を行なった。
4. 本調査は、彦根市教育委員会社会教育課技師本田修平・谷口徹（現彦根城博物館学芸員）が担当し、実測図等は調査協力員桂田峰男（現山東町教育委員会）・円城伸彦・沢田具高（岐阜経済大学OB）が主に行なった。この他、多くの方々の御協力を得た。
5. 現地の調査については、国立奈良文化財研究所宮本長二郎氏の御教示を得た。また、遺物の整理にあたっては、県立近江風土記の丘資料館秋田毅・愛知県陶磁資料館井上喜久男両氏の御教示を得た。記して感謝したい。
6. 本調査の出土遺物等の資料は、彦根市教育委員会で保管している。



## 目　　次

古屋敷遺跡	3
出土遺物観察表	10

### 図　版

図版 1～15	23
写真図版 1～14	38

# 古屋敷遺跡

## 1 位置と環境

古屋敷遺跡は、滋賀県彦根市日夏町 4545 他に所在する。この地は、彦根市南部の湖岸にある独立丘陵である荒神山の東側の山裾に位置し、眼前には宇曽川が西流して琵琶湖へと注ぐ。調査前の地目は田と畠地であったが、地元の人の話によれば、以前は深い湿地であったとの事であり、冬の渇水時においても湧水が跡切れる事なく湧いていた。地形的に見ても荒神山の谷水がここにあつまっており、宇曽川には堤防で塞さがれて水の捌け口がなく、畠地でも湿気が強かった。現在の古屋敷周辺の地形は宇曽川等の沖積作用により広い沖積地が広がっており、曾根沼・野田沼の旧内湖が琵琶湖より隔てられ沼として残っている。以前の自然地形は、荒神山の周辺に内湖を抱く湖岸線が広がり、宇曽川は低地を目指して流れ、内湖を介して琵琶湖へと注いでいたと考えられる。このような自然環境のもとで、荒神山東側の裾部には「古屋敷」と言う小字が数ヶ所あり、現在の日夏町も「泉」・「妙楽寺」等の小字に分かれており、この在所は元来小字に古屋敷の名を残す所であったのが、中世末期以降に現在の地に集落が形成されたものと考えられる。

古屋敷遺跡集辺の遺跡は、現在知られているものでは弥生時代まで遡ることができる。すなわち、日夏町の西側に広がる妙楽寺遺跡では、宇曽川河川改修および場整備時の調査で弥生時代中期以降平安時代に至る遺物の出土が知られている。また、川瀬馬場町の県立河瀬高等学校建設時の県教育委員会の調査ではピットを中心としたこの時期の遺構が調査されている。古墳時代前期には、前述したように妙楽寺遺跡等で遺物の出土が知られている。荒神山は数多くの神社・寺院が建立されており、あたかも聖域のごとき様相を見せているが、現在25基の古墳時代後期の群集墳が確認されている。この古墳群は、一部林道の建設時に破壊されたらしく、出土品が市立稲枝東小学校に保管されており、6世紀後半を中心とするものと言われている。この他、南側の山腹にある延寿寺には、裏山の古墳から出土したと伝えられる須恵器・馬具等が保存されている。現時点で開口してその主体部を確認できる古墳はいずれもが横穴式石室を持つものである。歴史時代には、現在その南側半分が干拓され、北側半分が曾根沼緑地公園として整備されている曾根沼は、現在内水の増減に影響をおよぼしているが、『彦根市史』によれば東大寺莊園霸流莊と推定されている。荒神山西側の下岡部町地先には屋中寺廃寺があり、重孤文の軒平瓦・单弁と複弁の蓮華文軒丸瓦の出土が

知られており、この他に耕地整理時に出土したと言われる直径60cm以上の柱根が伝えられている。この時代の明確な集落跡はまだ不明であるが、妙楽寺遺跡等で遺物の出土が知られている。以上の様に古屋敷遺跡周辺の歴史はまだまだ不明であり、今後の調査でその詳細が明らかになって来るものと思う。

『彦根市史』には、泉古屋敷の絵図として山裾から屈曲して川が流れている地割りの図が記載されている。その解説には、荒神山東側の丘陵に唐崎神社があり、その尾根上に日夏城があったと言われ、前記した泉古屋敷の絵図はこの日夏城に伴なう「城下町」であると言うことである。日夏氏は、「佐々木南朝諸士帳」や大洞弁天本地堂の「当国古城主等名」に記載のあるこの地の土豪で江南の六角氏に仕えていた。彦根の地は、室町時代には江南の六角氏と江北の京極氏（後には浅井氏）との勢力の境にあたり、在地の小土豪が多くの城館を築いていた事が知られている。荒神山南側の独立丘である山崎山も地元では古城山と言われ巡礼街道を見下す位置にあり、この山頂に中世の城館があったと言われる。以上のように当遺跡周辺における中世後期の歴史は、大きくは2大勢力が責めぎ合う中で形成されたと言えるが、まだまだその細部については今後の研究を待ちたい。

## 2 調査に至る経過と調査方法

古屋敷遺跡の発掘調査事業は、彦根犬上広域廃棄物管理組合の廃棄物投棄地新設に伴ない事前調査として実施したものである。現在の廃棄物投棄場は、調査地の西側に位置しており、年々投棄物が増加する中で、飽和状態に近づき、早急に新たな投棄地を作る必要があった。その予定地として、今回の調査地が計画された。

彦根犬上広域廃棄物投棄場管理組合は、当該地の遺跡の確認調査依頼を昭和59年5月29日付けで当教育委員会に提出した。当教育委員会では、現地の確認調査を実施したが、その結果須恵器等の散布地である事を確認した。また、小字名に古屋敷とある事や『彦根市史』に泉古屋敷の古絵図が記載されている事等により、遺跡が予定地内に存在し事前調査が必要であるため、彦根犬上広域廃棄物投棄場管理組合と協議に入った。

遺跡は、小字古屋敷を中心に広がっている事が予想されたが、その明確な範囲は不明であるため、先ず重機にて試掘調査を実施して遺跡の範囲を把握した後に調査計画を立てることとした。

試掘調査約3万m<sup>3</sup>に12ヶ所の2×4mのトレンチを設定して行なったが、この結果、宇曾川堤防に沿った地域で古墳時代後期以降の包含層を確認し、また古屋敷の小字名

をもつ畠地部分では中世の遺物を包含する整地層とその下層で古墳時代の包含層を確認した。この試掘調査の結果に基づき、宇曾川堤防沿いの地域ではトレンチを設定して遺跡の性格を把握する事を主目的として調査を行い、南側の畠地では中世の集落跡が検出される事が予想されるため、その全様を把握するべく面的に調査を実施する計画を立てた。

現地の調査は昭和59年12月20日より始め、中間に一時中断はあるものの昭和60年11月30日まで実施した。その後、遺物・図面等の資料整理を行ない昭和62年3月31日をもって全ての作業を終了した。

### 3 調査結果

調査は、調査計画にもとづき宇曾川堤防に沿った田にトレンチを設定することから始めた。1トレンチから5トレンチまでは沖積層と考えられる青灰色粘土層で古墳時代から中世までの遺構面が確認できた。

#### - 1～6 トレンチ -

宇曾川堤防の道から県立荒神山自然少年の家へ行く道沿いの田に設定したトレンチで、40cmの耕作土を掘り下げると第2層は茶灰色粘土層が30cmで第3層は南側3分の1が黒灰色粘土層で北側が濃褐色礫混り層になる。この黒灰色粘土層は包含層で古墳時代を中心とする遺物を出土した。濃褐色礫混り層には直径50cmほどのピット状の砂の入った所があった。このピット状の落ち込みを掘り込んだのであるが、結果から言えば、この落ち込みは遺構ではなく、湧水のあとと考えられる。

2～6トレンチは、基本的に耕作土の下に20cmの黄褐色粘質土層があり、第3層が茶灰色から黒灰色粘土層となり、第4層は青灰色粘土層になり、この層が遺構面であった。ただし、2トレンチは、2～3層が黄褐色砂質土層と灰色粘土層の互層になり、かなり厚い層であり、この部分はかなり激しい沖積作用を受けていたと思われ、部分的に冠水した時の砂を集めたと考えられる層もあった。遺構は溝を主とするもので、旧水田の畦および溝が断面で確認できた。遺構の溝内には極少量ではあるが古墳時代以降の遺物が入っていた。この他、ピットも若干検出されたが、建物跡とは考えられない。

#### - 7～20 トレンチ -

面的な調査を行なった地域は、南端に荒神山からの尾根が張り出した三角地になる畠地で、北側の水田面より60cmほど高くなる。トレンチ番号は、調査区域を設定した順に付けて行った。

先ず全体的な概要を記せば、東側の宇曽川堤防沿いは、耕作土の下に若干遺物の入った包含層があり、第3層は砂層となりこの下で灰色粘土層になる。この地域は、旧水路もしくは旧河道と考えられ、9トレンチではここに下りる様に2ヶ所の石段らしい石組みがあった。この様に遺跡の地形は西側に山を背負い、東側前面に旧河道が通り、南側には尾根が張り出し、この尾根の極には谷が抜けており、北側には低湿地もしくは水田が広がる地形に位置している。次に各トレンチごとの遺構を記してみたい。

#### - 7 トレンチ -

畠地の北端に堤防と並行するように同一レベルの微高地があり、ここに定設したトレンチであるが、耕作土の下は灰色粘土と砂層の互層であり、石列は砂層に乗っていた。集落との関係は不明であり、砂層は冠水時に溜ったものと考えられる。

#### - 8・10 トレンチ -

8トレンチを中心に10・15トレンチにまたがって1つの地割が検出できた。この地割は、南と西側を石組の溝で、北側は石敷遺構（溝の側石が抜かれた可能性もある）で区画された、ほぼ $14\text{m} \times 24\text{m}$ のものである。地割内の主な遺構は溝・ピットで遺構面の一部で山土を張ったと思われる所もあった。また、この地割の中央部に「ヨ」の字状の石組があり、若干の炭化物が入っておりかまど状の遺構である。10トレンチ北側の人頭大の石積みは、畠の区画用のものである。

#### - 9 トレンチ -

8トレンチの地割の南側の区画で、9トレンチを中心に14トレンチの東側、8・15トレンチの1部を含むほぼ $20\text{m} \times 30\text{m}$ の長方形のものである。東・南側は整地層が落ち込み、西側は大きな石が据えられ一段高くなっている。北側は8トレンチの石組溝で区画されている。東と北側の区画付近は、遺構を検出できなかった地域が「L」字状に広がり、道状のものと考えられる。また、方形の升状の石組が2ヶ所地割の西側で検出され、このうちSX-4は、埋土を掘り込むと底は小礫を入れた上に山地を敷いてあった。ピットは多数検出されたが建物は不明と言わざるを得ない。

#### - 11 トレンチ -

9トレンチの地割の西端から始まり、西側に1段さがったもので、東・南側は落ち込み、西側は溝、北側は小礫を入れて山地を張った道状の遺構で区画された、ほぼ $14 \times 12\text{m}$ の長方形をなす。区画内は整地層の違いが「コ」の字状に見えたがピットは比較的少なく建物等は不明である。

#### - 14・17 トレンチ -

調査で確認した地割の中で最も大きいもので、ほぼ $28\text{m} \times 30\text{m}$ の区画と考えられる

が、山裾の13トレンチとの明確な区画がなく、ここも入ると考えれば36m×30mの区画になる。地割は、南側を道状の遺構、東側を前記した土壇上の遺構、北側は石組の溝で区画されている。区画北側と西側は溝を掘り込むと畝状になり、整地層も他と違ひ黒ずんでいる事から、屋敷内の畑の痕跡と考えてよいだろう。方形の升状石組は、東側に2ヶ所、西側畝状の遺構の東側で溝でつらなったかたちで2ヶ所確認している。ピットは、升状の石組遺構の間に多数集中しており、東側を画する土壇状遺構と並行した方向性はうかがえるが、具体的な規模等は不明である。

#### -15・16トレンチ-

四方を石組み溝で区画された、ほぼ25m×20mの地割である。石組溝は、最も保存状態の良かった東側のものでも、側石が2段積んであっただけであるが、本来的にはもう1段ぐらい積んであったものと思われ、底は素掘りのままであった。この地割も北西隅みに畝状痕跡と考えられる溝があるが、極めて小さいものである。南側地割溝中央部には溝を区切るように升状石組遺構の痕跡と考えられる遺構があり、その東側には溝に接して「L」字状に石組がある方形の掘り込みがあるが、その性格は不明である。この他、方形の掘り込みが2ヶ所あり、ピットも地割と同様の方向性が見られる。

#### -18トレンチ-

11トレンチで確認した地割に連なりこの西側に位置する10m×10mのほぼ正方形をなす小区画と、この南側に並ぶ8m×10mの小区画が解認できた。北側の地割内では若干のピットが検出できたが、南側の小区画では集石状の石溜が2ヶ所の他遺構は確認できなかった。この地割の石組溝の南と西側には無遺構の道状の地域があり、その南側に素掘りの溝で区画された地割があり、ピット等の遺構も確認しているが、この地割の全様は不明である。また、小区画の西側にも15m×12mと考えられる地割が検出できた。この地割は12トレンチも含むもので、山裾に位置しているが、整地層ではなく、灰色の粘土層になりかなり強い湿地である。ピット内には1ヶ所だけであったが柱根の残存が見られた。

#### -19トレンチ-

15・16トレンチで確認した地割の北側に位置し、畠地の北端に設定したトレンチで、地割の溝から分岐する溝やピット等を検出したが、本来地割があり削平されたものかどうかは不明である。

以上、今回の調査では、少なくとも9区画の地割を確認するとともに、その区内に石組の升状遺構・ピット・素掘りの溝・石段状の石組等を検出することができた。

また、地割の溝は18トレンチで確認できたように一部で溝の付け替えもあり、ある程度の期間があった事がうかがえる。

遺構の検出面は、耕作土の下で若干の遺物の入った整地層を検出したが、畠地であった関係かも知れないが、この面で遺構は検出できなかったため、この層を掘り下げ第3層を第1遺構面とした。出土遺物の大半は、この面を精査している時点でのもので、15世紀を中心として14世紀から16世紀の中ごろまでのものである。これ以降の時代を示す遺物は、極少量になるが、この事は集落が廃絶した後に、畠地として利用されて現在に至っているためと考えられる。また、下には古墳時代の遺構面があると考えられ、整地層に須恵器等の遺物が混っていた。この報告書に図示し得た遺物は出土した遺物の極一部であり、陶磁器の他に土師質・瓦質の土器も出土している。また、集石遺構等には五輪塔・宝篋印塔の残欠・石臼等が入っており、他に硯・輸入錢等も出土している。

中世後期の集落跡の調査は、まだまだ調査例が少なく、今回の調査でも建物等を想定する事はできなかったが、より精密な資料整理を実施すればまだまだ知りうる事が多いと思われる。

#### 4 まとめ

今回の発掘調査で確認できた事を以下記したい。

- 1) 遺構面は、今回の調査で検出した第1遺構面以外に少なくとも2面ある事が断ち割りした断面で確認できている。
- 2) 地割は、溝・道・土塁状遺構で区域割されており、遺構の状況から屋敷割と考えられる。
- 3) 第1遺構面の遺構は、石組溝の造り替え等から見て少なくとも2時期以上あると考えられる。
- 4) 出土遺物は、14世紀から16世紀中期までを主とし、これ以降の遺物はほとんどない事から、この時期に集落は廃絶したと考えられる。
- 5) 出土した日常雑器は、信楽焼・瀬戸美濃系・常滑焼・土師質瓦質陶器・輸入陶磁器等であり、器種によって製産地が限定されていると考えられる。
- 6) 当遺跡は、確実に古墳時代までは遡のぼれる。

以上、まだまだ調査例が少ない中世後期の集落跡に1つの資料を加えたわけであるが、遺構の性格を明確にするまでには至らなかった。また、「彦根市史」に記載のある泉古屋敷の絵図は、今回の調査地点とは異なっていると考えられ、現在この絵図は

不明で小さな写真が残っているだけである。今後この絵図が出てきて、今回の調査の資料との照合が可能になれば、中世後期における集落の全貌が明らかになるかも知れない。今回の調査で明らかにできなかった事は、今後の調査にまちたい。

出 土 遺 物 観 察 表

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
1	信 梨 鏽	口径 39.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ やや肩の張った体部より頸部は内傾して立ち上がる。</li> <li>○ 口縁部は屈曲して開き、内面に段を作り、端部を外面に折り返して垂下させ、口縁帯を作る。</li> <li>○ 端部は、やや外方に引き出し、丸くおさめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにロクロナデ調整。</li> <li>○ 粘土紐の輪積み形成後、右上方にナデ上げて形成しており、内面に痕跡が残る。</li> </ul>	<p>胎土：3mm以下 の石英粒等を含む 色調：赤褐色 焼成：硬</p>	14T N O 10内
2	信 梨 鏽	口径 44.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 頸部は外彎しながら立ち上がる。</li> <li>○ 口縁部内面には段を作り外傾して、外開き、端部は若干外側に引き出し、外面は折り返して口縁帯を作り垂下しておさめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにロクロナデ調整。</li> <li>○ 成形法は輪積みによるものと思われる。</li> </ul>	<p>胎土：3～4mm の石英粒等を含む 色調：淡赤褐色 焼成：硬</p>	16T S D -2 延長
3	信 梨 鏽	口径 42.9	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内傾した傾部から口縁部は屈曲して開き、内面に段を作る。</li> <li>○ 口縁部は、折り返し口縁帯を作り、端部上面を外側に若干引き出し、端部下面を垂下させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにロクロナデ調整。</li> </ul>	<p>胎土：2mm前後の 石英粒等を含む 色調：淡茶灰色 焼成：硬</p>	16T S D -2 内
4	信 梨 鏽	口径 35.9	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 張った肩部から頸部は内傾しながら立ち上がる。</li> <li>○ 口縁部は内面に段を作り、端部を外側に引き出し、外面下半分は折り返し、口縁帯を作り垂下しておさめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 輪積み成形と思われ、内外面ともにロクロナデ調整。</li> </ul>	<p>胎土：若干の1 ～2mmの 石英粒等 が混る 色調：明赤褐色 焼成：硬</p>	18T 第1遺構面
5	信 梨 鏽	口径 36.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 肩の張らない体部より頸部は外反して開く。</li> <li>○ 口縁部は内面の頸部との境に段を作</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにロクロナデ調整。</li> </ul>	<p>胎土：4mm以下 の石英粒等を含む</p>	15T 第1遺構面

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
			り、外面に折り返し下方に引き出し口縁帶を作る。		色調：明赤褐色 焼成：硬	
6 信 楽 麵	口径 39.6		○ 頸部は外彎しながら立ち上がる。 ○ 口縁部は内面に段を作り、端部は外側に引き出し、外面は折り返して、口縁帶を作る。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 成形法は輪積みによるものと思われる。	胎土：3 mm前後の石英粒等を含む 色調：明赤褐色 焼成：硬	10T 第1遺構面
7 信 楽 麵	口径 44.6		○ 頸部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外面に折り返し、口縁帶を作り、内面は強いナデで段を作り、端部外面に引き出しておさめる。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 粘土紐による輪積みと考えられる。	胎土：3 mm前後の石英粒等を含む 色調：淡赤褐色 焼成：硬	11T 第1遺構面
8 信 楽 麵	口径 25.6		○ 最大腹径は、やや上位部にあり、肩はある程張らず頸部は内傾して立ち上がる。 ○ 口縁部は屈曲して、外面をふくらませ、上半部を外側に引き出し端部上面をや平に作る。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 輪積み成形で部分的に粘土紐痕が残る。	胎土：3 mm前後の石英他の砂粒を若干含む 色調：明赤褐色 焼成：硬	14T SD-3
9 信 楽 麵	口径 24.6		○ 頸部は、やや外反ぎみに立ち上がる。 ○ 口縁部は屈曲して、内面に段を作り、口縁帶を成形する。 ○ 端部を外面に引き出し、口縁帶下部も若干下方に引き出す。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：3 mm以下の石英粒等を含む 色調：淡乳赤色 焼成：やや硬	14T 石溜No.1内
10 信 楽 麵	口径 27		○ 頸部は外彎ぎみに内傾して立ち上がる。 ○ 口縁部は屈曲し、内面に段を作りながら立ち上がり、端部を外側に引き出して、丸くおさめる。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 成形法は輪積みによるものと思われる。	胎土：最大 5 mmの石英粒を若干含む 色調：赤褐色	14T 第1遺構面

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
11	常 滑 齋	口径 28.3	○ 頸部は内傾して立ち上がる。 ○ 口縁部は、外側下方に屈曲し、端部を上方に引き上げ口縁帯を作る。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 輪積み成形で部分的に粘土組痕が残る。	胎土：1 mm前後の砂粒が入る 色調：暗灰褐色 焼成：硬	15 T SD-1と SD-2の 交差部 燒成：硬
12	信 楽 壺	口径 16	○ 外彎して開く頸部より、口縁部は外面をやや肥厚させて玉縁状に作る。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：2 mm以下の石英粒等を含む 色調：淡灰色 焼成：硬	17 T 第1遺構面 燒成：硬
13	信 楽 壺	口径 12.1	○ 頸部は内傾して立ち上がる。 ○ 口縁部は外側に折り返し、玉縁状に作る。	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 鉄釉をかける。	胎土：1～2 mmの砂粒を含む 色調：暗茶褐色 焼成：硬	11 T 第1遺構面 燒成：硬
14	信 楽 壺	口径 11.3	○ やや張った肩部から頸部は、内傾ぎみに立ち上がる。 ○ 口縁は折り返し、玉縁状に作る。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：3～4 mmの石英粒他を含む 色調：茶褐色 焼成：硬	15 T SD-2内 燒成：硬
15	信 楽 壺	座部径 14.4 ( 14と同一個体と考えられる )	○ 平底の底部から内彎しながら立ち上がる。	○ 底部外面は不調整。 ○ 底部内面及び体部内外面はロクロナデ調整。 ○ 粘土紐の輪積み成形と考えられる。	胎土：4 mm以下の石英粒他を含む 色調：茶褐色 焼成：硬	15 T SD-2内 燒成：硬
16	信 楽 壺	口径 19.8	○ 底部は平底に作られる。	○ 体部は内外面ともにロクロナデ調整。胎土：3 mm以下	15 T	

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
	皿	器高 4	○ 体部は内彎して開き、端部を内側に引きしづみにして丸くおさめる。 ○ 底部は内面ロクロナデ調整で外面は不調整。	○ 底部は内面ロクロナデ調整で外面はの石英粒を若干含む ○ 底部内部及び体部はロクロナデ調整。	○ 胎土：赤褐色 ○ 色調：硬 ○ 焼成：硬	第1遺構面
17	信 楽 鉢	口径 16.8 器高 7.2	○ 底部は平底で体部は外傾して開く。 ○ 口縁部は弱く折り曲り、上方に立ち上がり、端部を平におさめる。	○ 底部外面は不調整。 ○ 底部内部及び体部はロクロナデ調整。	○ 胎土：2 mm前後の石英粒他を含む ○ 色調：暗茶褐色 ○ 焼成：硬	15 T SD-2 内
18	信 楽 鉢	口径 16.5 器高 7.9	○ 底部は平底で体部は内彎して立ち上がる。 ○ 口縁部は端部を平にする。 ○ 器表は貝殻状に内外面ともに剥離している。	○ 内外面とともにロクロナデ調整。	○ 胎土：2～3 mmの石英粒を含む ○ 色調：暗灰色 ○ 焼成：硬	8 T SD-1
19	信 練 り 鉢	口径 28.4	○ 体部はやや内彎ぎみに開き、口縁部は外面に引き出し断面三角形に肥厚させる。 ○ 穂り目はないが、下半分はより磨り減っている。	○ 内外面とともにロクロナデ調整。	○ 胎土：最大 7 mmの石英粒等を含む ○ 色調：淡赤褐色 ○ 焼成：硬	14 T 第1遺構面
20	信 練 り 鉢	口径 25.6 器高 11.2	○ 平底の底部より直線的に開き、口縁部は端部を外側に弱く引き出しておさめる。 ○ 穂り目はないが、下半分はよく磨り減っている。	○ 内外面とともにロクロナデ調整。 ○ 底部外面は不調整。	○ 胎土：3 mm以下の石英粒等を含む ○ 色調：赤褐色 ○ 焼成：硬	11 T 石列内
21	信 楽 楠	口径 28.6	○ 体部は直線的に開き、口縁部下で内彎して立ち上がり、口縁部を外側に屈曲させて引き出し、端部は丸くおさめる。	○ 内外面ロクロナデ調整。	○ 胎土：2 mm前後の砂粒を含む	14 T 石溜 No.3

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
			○ 横り目はヘラ状工具による1条1単位でごく浅いものである。		色調：明赤褐色 焼成：硬	
22	信 櫛 楽 鉢	口径 29.7	○ 体部はやや内巻きみに開き、端部を平ておさめる。 ○ 横り目はヘラによるもので1本の単位である。内面はよく磨り減っている。	○ 内外面とともにロクロナデ調整。	胎土：3 mm前後の石英粒等を含む SD-2 延長内 色調：淡褐赤色 焼成：硬	16 T
23	信 櫛 楽 鉢	底部径 13.5	○ 平底の底部より、体部は直線的に開く。 ○ 横り目はヘラ状の工具により1条1単位のしつかりした櫛目を入れる。 ○ 内面器表はよく磨り減っている。	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 底部不調整。	胎土：3 mm以下 第1遺構面 の石英粒等を含む 色調：乳褐色 焼成：硬	17 T
24	信 櫛 楽 鉢	底部径 16.1	○ 平底の底部より、体部は、やや内巻きみに開く。 ○ 横り目はヘラ状の工具により、1条1単位にしつかりと入れる。 ○ 内面器表は、よく磨り減っている。	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 底部不調整。	胎土：5 mm以下 第1遺構面 の石英粒等を含む 色調：淡乳褐色 焼成：硬	11 T
25	信 櫛 楽 鉢	底部径 15.6	○ 平底の底部より体部は直線的に開く。 ○ 横り目は1条づつのへら状工具で入られる。	○ 内外面とともにロクロナデ調整。 ○ 底部外面は不調整。	胎土：5 mm以下 第1遺構面 の石英粒等を含む 色調：淡乳赤色 焼成：硬	16 T
26	信 櫛 楽 鉢	底部径 14.4	○ 平底の底部より体部は直線的に開く。 ○ 2条1単位の櫛目を入れる。 ○ 体部内面の器表は、より磨り減っている。	○ 内外面とともにロクロナデ調整。 ○ 底部外面は不調整。	胎土：3 mm以下 第1遺構面 の石英粒等を含む 色調：淡乳褐色 焼成：硬	10 T

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
27	信 横 楽 鉢	口径 42.6	○ 体部は内彎きみに開き、口縁部は外側に屈曲させて端部を丸くおさめる。 ○ 柳状工具による3条の樋り目をつける。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：3mm前後の石英粒を含む 色調：淡黄褐色 焼成：硬	10T 第1遺構面
28	信 横	口径 38.4 器高 14.3	○ 底部は平底で体部は直線的に開き、口縁部を外面に引き出し端部は平におさめる。 ○ 口縁部と体部の境、内面に弱い沈線をつける。 ○ 片口は破片であるが、ヘラ状の工具で端部内面を成形している。 ○ 4条の柳状工具により、2単位1セットの樋り目をつける。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：3mm以下の石英粒を含む 色調：茶褐色 焼成：硬	17T 第1遺構面
29	信 横	口径 31.2	○ 体部はやや内彎きみに開き、口縁部を外側に屈曲させて、端部外面に段を作り、端部を丸くおさめる。 ○ 残存部分で4条の柳状工具による樋り目をつける。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：4mm前後の石英粒等を含む 色調：赤褐色 焼成：硬	15T 石溜No.7 内
30	信 横	口径 31.9	○ 体部は直線的に開き、口縁部を弱く外側上方に引き出し、端部を丸くおさめる。 ○ 口縁内面下に弱い段を作り、そこに沈線を入れる。 ○ 4条1単位の樋り目を入れる。	○ 内外面ロクロナデ調整。	胎土：3mm以下の砂粒を含む 色調：淡褐灰色 焼成：硬	15T 第1遺構面
31	信 横	口径 32 器高 15.4	○ 底部は平底で体部は直線的に開き、口縁部は外側を若干肥厚させ端部を上方に引き出す。 ○ 4条で1単位の樋り目を入れる。	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 底部外面は不調整。	胎土：5mm以下の石英粒等を含む 色調：茶褐色	15T SD-2内

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
			○ 片口は、親指状のもので外側に押し出して成形している。		焼成：硬	
32	信 樋 楽 鉢	口径35.8 器高16.8	○ 底部は平底であるが、外面にゲタ痕と思われる高まりがある。 ○ 体部は直線的に開き、口縁部下を弱く内弯させ、口縁部を外側に屈曲させ、内面に段を作り、端部を上方に引き出す。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 底部は不調整。	胎土：3mm以下の石英粒等を含む 色調：茶褐色 焼成：硬	15T SD-1内
33	信 樋 楽 鉢	底部径17	○ 平底の底部より体部は直線的に開く。 ○ 5条1単位の櫛目を入れる。 ○ 体部内面の器表は磨り減っている。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 底部外面は不調整で、六角形のゲタ印と思われる痕跡がある。	胎土：最大6mmの石英粒等を含む 色調：赤褐色 焼成：硬	11T 第1遺構面
34	信 樋 楽 鉢	底部径13.5	○ 平底の底部より内弯きみに開く。 ○ 5条1単位の櫛目を入れる。 ○ 体部内面の器表はよく磨り減っている。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 輪積み成形で底部外面は不調整。	胎土：5mm以下の石英粒等を含む 色調：淡褐赤色 焼成：やや軟	15T SD-1と SD-2の 交差点内
35	瀬戸美濃系 樋 鉢	底部径9.8	○ 平底の底部より体部は直線的に開く。 ○ 15条1単位の巾広い櫛目を入れ、底部内面にも「×」印状に櫛目を入れる。	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 底部は糸切り底。 ○ 内外面ともに鉄化粧している。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬	12T 第1遺構面
36	瀬戸美濃系 樋 鉢	底部径10.1	○ 平底の底部より体部は直線的に開く。 ○ 12条1単位の櫛目を入れ、底部内面にも1単位の櫛目を入れる。	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 底部は糸切り底。 ○ 内外面ともに褐釉をほどこす。	胎土：良好 色調：灰茶色 焼成：硬	17T 第1遺構面
37	瀬戸美濃系 樋 鉢	底部径10.5	○ 平底の底部より体部は直線的に開く。 ○ 12条1単位の櫛目が全面に入り、	○ 内外面ロクロナデ調整。 ○ 底部は糸切り底。	胎土：良好 色調：暗青灰色	17T 第1遺構面

番号	種類・器形	法量	形態	調査	整	胎土・色調・焼成	備考
			底部にも、ほぼ全面に櫛目を入れる。	○ 内外面ともに櫛釉をほどこす。		焼成：硬	
38	瀬戸美濃系天目茶碗	口径11.8 器高 6.2 高台径4.2	○ 内反り高台から体部は「八」の字状に開き、口縁部下を上方に折り返し、口縁部を外側に外反させ、端部を丸くおさめる。いわゆる「天目型」をなす。 ○ 紬は、櫛釉を内面と外面上半部にかけ、露胎部には鉄釉を化粧がけする。	○ 全体をロクロで成形して、高台及び下半部外面はへラ削り成形する。		胎土：精良 色調：釉：明茶 骨部：露胎部： 赤褐色 焼成：硬	8T 第1遭構面
39	瀬戸美濃系天目茶碗	口径 11.2 器高 6.05 高台径 4.1	口径 11.2 器高 6.05 高台径 4.1	"	"	胎土：精良 色調：釉：茶褐色 露胎部： 赤褐色	15T SD-1
40	瀬戸美濃系天目茶碗	高台径 4.1	○ 内反り高台から体部は内彎して開く。 ○ 紬は櫛釉を内面全体と外面上半部にかけ露胎部には化粧がけしていない。	○ 全体をロクロで成形して高台及び下半部外面をへラ削り成形する。		胎土：良好 色調：釉：黒色 の地に茶褐色の 紋 露胎部： 淡白褐色 焼成：硬	11T 第1遭構面
41	瀬戸美濃系天目茶碗	高台径 4.2	○ 輪高台から体部は内彎ぎみに「八」の字状に開く。 ○ 紬は櫛釉を内面全体と外面上半部にかけたが、高台まで流れており、露胎部に鉄釉を化粧がけする。	○ 全体をロクロで成形して、高台及び下半部外面をへラ削り成形する。		胎土：精良 色調：釉：黒色 で釉だまりは白灰色 露胎部： 濃海老茶色 焼成：硬	18T 第1遭構面

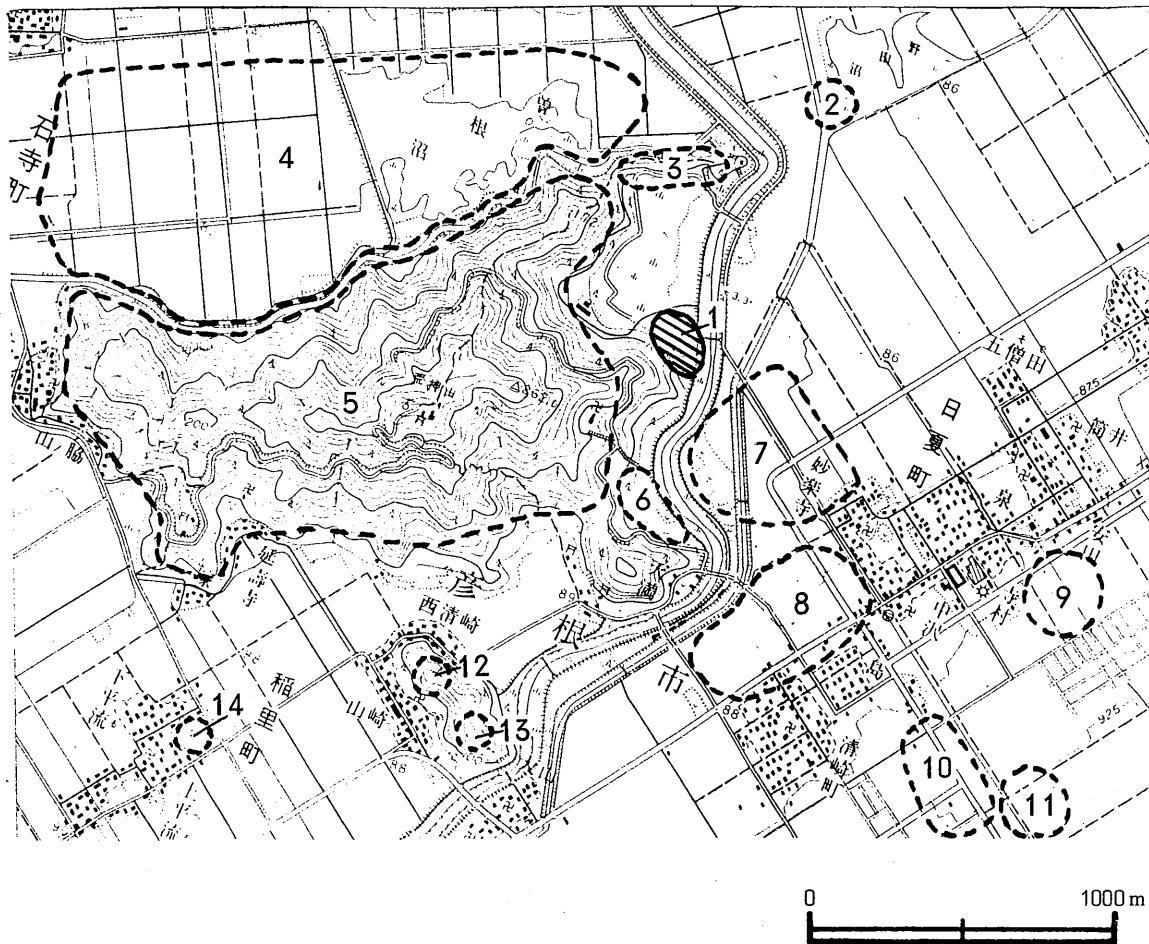
番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
42	瀬戸美濃系 狛		<ul style="list-style-type: none"> <li>厚さ 1 cmほどの台に前足を立て、後足を折り曲げ座った形を表わす。</li> <li>全体に褐釉をかける。</li> </ul>		胎土：精良 色調：釉：茶褐色の地に黒褐色の斑文 胎土：淡赤褐色	15T 第1遺構面
43	瀬戸美濃系 平 茶碗	口径 17.4 器高 6.8 高台径 5.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>低い輪高台より体部は弱く内彎して開き、口縁部下で上方に折り返され弱い襞を作り、口縁部は外側に折り返されて端部を丸くおさめる。</li> <li>釉は内面全体と外面上半部に灰釉をかけており、貫入が入る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体をロクロで成形しており、輪高台は削り出して成形している。</li> <li>内面にトレン痕を残す。</li> </ul>	胎土：精良 色調：釉：オリーブ色 胎土：淡白褐色 焼成：硬	11T 第1遺構面
44	瀬戸美濃系 平 茶碗	口径 15.8 器高 6.8 高台径 5.3	<ul style="list-style-type: none"> <li>輪高台の底部より体部は弱く内彎して開き、口縁部は心持外反して開き、端部をシャープにおさめる。</li> <li>釉は、内面全体と外面上半部に灰釉をかけており貫入が入る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体をロクロで成形しており、輪高台は削り出して成形している。</li> <li>内面にトレン痕を残す。</li> </ul>	胎土：精良 色調：釉：暗緑 胎土：淡灰白色 焼成：硬	15T 第1遺構面
45	瀬戸美濃系 小 ( 緑釉 )	口径 10.5 器高 2.35	<ul style="list-style-type: none"> <li>平底の底部から体部はやや外彎して開き、端部を丸くおさめる。</li> <li>口縁部に灰釉をかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体部内外面ともにロクロナデ調整。</li> <li>底部は糸切り。</li> </ul>	胎土：精良 色調：釉：淡灰色 胎土：淡白灰色 焼成：硬	14T 石溜 No. 7
46	瀬戸美濃系 小 ( 緑釉 )	口径 10.5 器高 2.9	<ul style="list-style-type: none"> <li>平底の底部から体部は外彎ぎみに開き、口縁部を弱く外側に引き出し端部を丸くおさめる。</li> <li>口縁部に灰釉をかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体部内外面ともロクロナデ調整。</li> <li>底部は糸切り。</li> </ul>	胎土：精良 色調：釉：淡緑色 胎土：淡	15T 石溜 No. 6

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・調整	備考
47	瀬戸美濃系皿(灰釉)	口径10.8 器高2.4 高台径6.1	○ 体部は弱く内彎して開き、口縁部は弱く外側に引き出し端部を丸くおさめる。 ○ 高台は輪高台である。	○ 内外面クロロナデ調整で高台は削り出しで成形する。 ○ 全面に灰釉をかけている。	胎土：良好 色調：淡黄緑色 焼成：硬	16T 第1遺構面 試掘1丁
48	瀬戸美濃系皿(灰釉)	口径8.8 器高2.3 高台径4.65	○ 輪高台の底部から体部は内彎して開き、口縁部は外側に折り返し端部を丸くおさめる。 ○ 全面に灰釉をほどこし、皿底部に12弁の印花を入れる。	○ 体部内外面ともにロクロロナデ調整。 ○ 高台は削り出しの輪高台で、その内に輪トチンが接着している。	胎土：精良 色調：釉：淡緑色 焼成：硬	試掘1丁
49	瀬戸美濃系皿(印花)	口径9.3 器高2.25 高台径5.2	○ 輪高台の底部から体部は内彎して開き、口縁部は、外側に折り返し端部を丸くおさめる。 ○ 全面に灰釉をほどこし、皿底部に12弁の印花を入れる。	○ 体部内外面ともにロクロロナデ調整。 ○ 高台は削り出しの輪高台。	胎土：精良 色調：釉：緑褐色 焼成：硬	試掘1丁
50	瀬戸美濃系皿(緑釉)	口径9.8 器高2.2	○ 平底の底部から体部は、やや内彎して開き、端部を丸くおさめる。 ○ 口縁部に灰釉をかける。	○ 体部内外面ともロクロロナデ調整。 ○ 底部は糸切り。	胎土：精良 色調：釉：緑灰色 胎土：淡 灰白色 焼成：硬	12T 第1遺構面 試掘1丁
51	瀬戸美濃系皿(緑釉)	口径10.0 器高1.9	○ 輪高台の底部から体部は内彎して開き、口縁部をやや外側に引き出し、端部を丸くおさめる。 ○ 外面全体と体部外面に灰釉をかける。 ○ 釉には貫入がある。	○ 体部内外面ともロクロロナデ調整。 ○ 底部は削り出しによる輪高台。	胎土：精良 色調：釉：淡緑色 胎土：淡 褐灰色 焼成：硬	15T SD-1 試掘1丁

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
52	瀬戸美濃系 おろし皿	底部径 8.6	○ 扁平な底部から体部は「ハ」の字状に開く。 ○ 底部内面におろし目を刻む。	○ 体部全体をロクロで成形し、底部は糸切り底である。 ○ おろし目はヘラで刻んでいる。	胎土：精良 色調：淡灰黄色 焼成：硬	17T 第1遺構面
53	瀬戸美濃系 おろし皿	底部径 8.2	○ 扁平な底部から体部は「ハ」の字状に開く。 ○ 底部内面におろし目を刻む。	○ 体部全体をロクロで成形し、底部は糸切り底である。 ○ おろし目はヘラで刻んでいる。 ○ 外面に灰釉の流れがある。	胎土：精良 色調：淡灰褐色 焼成：硬	10T 第1遺構面
54	瀬戸美濃系 水滴	底部径 2.9 器高 3.4	○ 平底の底部から体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短かく直立して端部を丸くおさめる。 ○ 注口部は筒状に直立して作り、後に「コ」の字状の耳をつけた。上半部に灰釉をかける。	○ 体部全体をロクロで成形し、底部は糸切り底である。 ○ 耳は張り付けてあるが、アーチ状に中が抜けていない。 ○ 注口部は張り付けあり、上から中に穴を開けている。	胎土：精良 色調：釉：淡緑 黄色 胎土：淡 白灰色 焼成：硬	14T No.3 内
55	青磁 壺	口径 20.7	○ ロート状に長く伸びた頸部から口縁部は横方向に引き出され端部を丸くおさめる。 ○ 外面は釉の溜り具合で釉調に濃淡が出来ており、釉には貫入が入っている。	○ 全体ロクロで成形しており、頸部には段が作られている。	胎土：精良 色調：釉：淡青 緑色 胎土：白 灰色 焼成：硬	16T SD-2
56	青磁 碗	高台径 5.4	○ 高い輪高台から体部は内彎して開く。 ○ 内面底に鱗花が入り、体部外面に、たて方向の縁が入る。 ○ 底部外面以外全体に釉をかけ、貫入がある。	○ 全体ロクロで成形している。 ○ 高台は張り付け高台。	胎土：精良 色調：釉：緑灰色 胎土：淡 灰色 焼成：硬	18T 第1遺構面
57	青磁 碗	高台径 5.6	○ 高い輪高台から体部は内彎して開く。 ○ 内面底部に草花紋を入れる。 ○ 底部外面以外全体に釉をかけ、貫入	○ 全体ロクロで成形している。 ○ 高台は削り出しと思われる。	胎土：精良 色調：釉：淡緑 灰色 焼成：硬	10T 第1遺構面

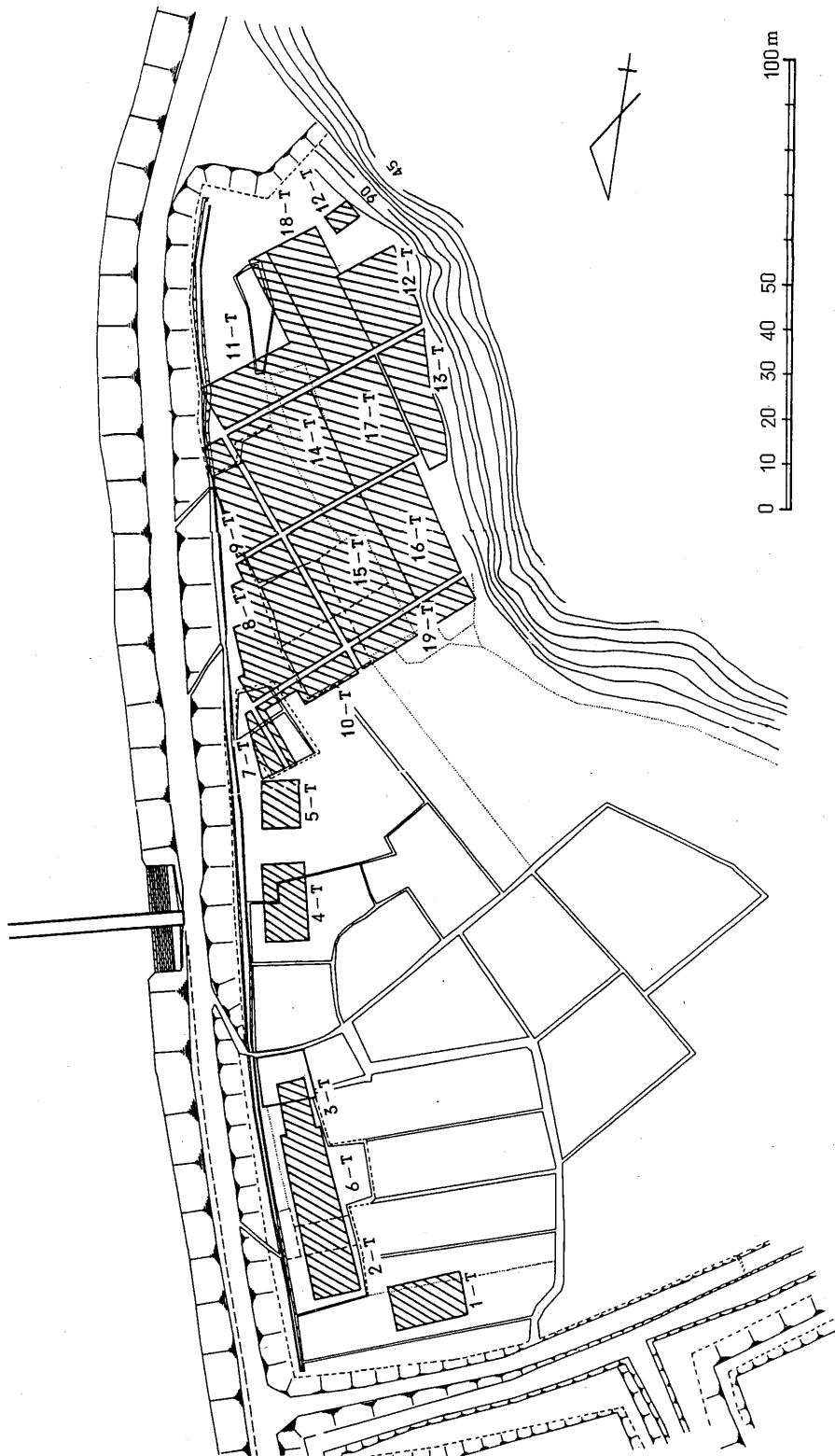
番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
			が入る。		胎土：淡灰色 焼成：硬	
58	白 磁 皿	口径 11.6 器高 3.0 高台径 6.6	○ 輪高台から体部は内彎して開き、口縁部は外側に折り曲げ端部を丸くおさめる。 ○ 細は高台端をのぞき、全体にかけ、貫入が入る。	○ 全体ロクロで成形している。 ○ 高台は張り付けている。 ○ 全体的に非常に薄く作られている。	胎土：精良 色調：釉：乳白色 胎土：白色 灰色 焼成：硬	10T 第1邊構面
59	白 磁 皿	口径 11.6 器高 3.2 高台径 6.1	○ 輪高台から体部は内彎して開き、口縁部は外側に折り曲げ端部を丸くおさめる。 ○ 細は高台端をのぞき、全体にかけている。	○ 全体ロクロで成形している。 ○ 高台は張り付けか。 ○ 全体的に非常に薄く作られている。	胎土：精良 色調：釉：乳白色 胎土：白色 灰色 焼成：硬	17T 第1邊構面
60	白 磁 皿	口径 13.8	○ 直線的に開く体部から口縁は外面を肥厚させ玉縁口縁を作る。 ○ 外面上半部と内面全体に釉をかける。	○ 全体ロクロで成形している。	胎土：精良 色調：釉：淡灰色 胎土：白色 灰色 焼成：硬	15T SD-1
61	常 滑 甕	口径 43.5	○ 頸部は外彎ぎみに内傾して立ち上がる。 ○ 口縁部は外側に折り返し口縁帯を作り、端部を上方に引き出して丸くおさめる。折り返しのため空洞がある。 ○ 割れ口をうるしと考えられるものでかため、再利用している。	○ 内外面ともにロクロナデ調整。 ○ 粘土紐の輪積み成形と考えられる。	胎土：1mm以下 の砂粒を含む 色調：外面：淡青灰色 内面：淡赤灰色 焼成：硬	10T 第1邊構面

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
62	常 滑 瓢	口径 40.8	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 強く肩が張った肩部より、頸部は内傾しながら、立ち上がる。</li> <li>○ 口縁部は外側に折り返し口縁帶を作り、端部を上方に引き出し、丸くおさめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにナデ調整。</li> <li>○ 輪積み成形で頸部をヘラ状の工具でおさえている。</li> <li>○ 頸部にヘラ記号がある。</li> </ul>	<p>胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗茶褐色 焼成：硬</p>	16T SD-2内
63	常 滑 瓢	口径 45	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内傾して立ち上がる頸部より、口縁は上方に立ち上がり上部内面を肥厚させる。</li> <li>○ 口縁部外面は折り返し、口縁帶を作り、端部上面を上方に引き出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにロクロナデ調整。</li> </ul>	<p>胎土：2mm以下の砂粒を含む 色調：海老茶色 焼成：硬</p>	18T 第1邊溝面
64	信 楽 瓢	口径 12.6	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 円彎した肩部から頸部は内傾して、立ち上がる。</li> <li>○ 口縁部は外側に折り返し、口縁帶を作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 内外面ともにロクロナデ調整。</li> </ul>	<p>胎土：2mm以下の砂粒を含む 色調：黒茶色 焼成：硬</p>	16T SD-3内



図版1 調査地点と周辺の遺跡

1 今回調査地点	8 蛭目遺跡
2 野田沼遺跡	9 寺村遺跡
3 日夏城跡	10 川瀬馬場遺跡
4 曾根沼遺跡	11 鶴ヶ池遺跡
5 荒神山古墳群	12 国昌寺遺跡
6 南谷遺跡	13 山崎山城跡
7 妙楽寺遺跡	14 平流城跡



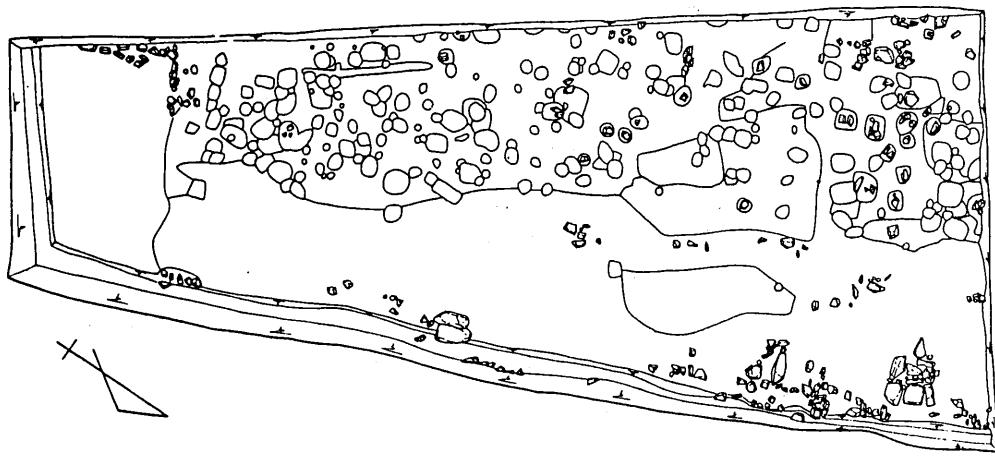
図版2 古屋敷遺跡トレンチ配置図



図版3 8-T・10-T遺構図



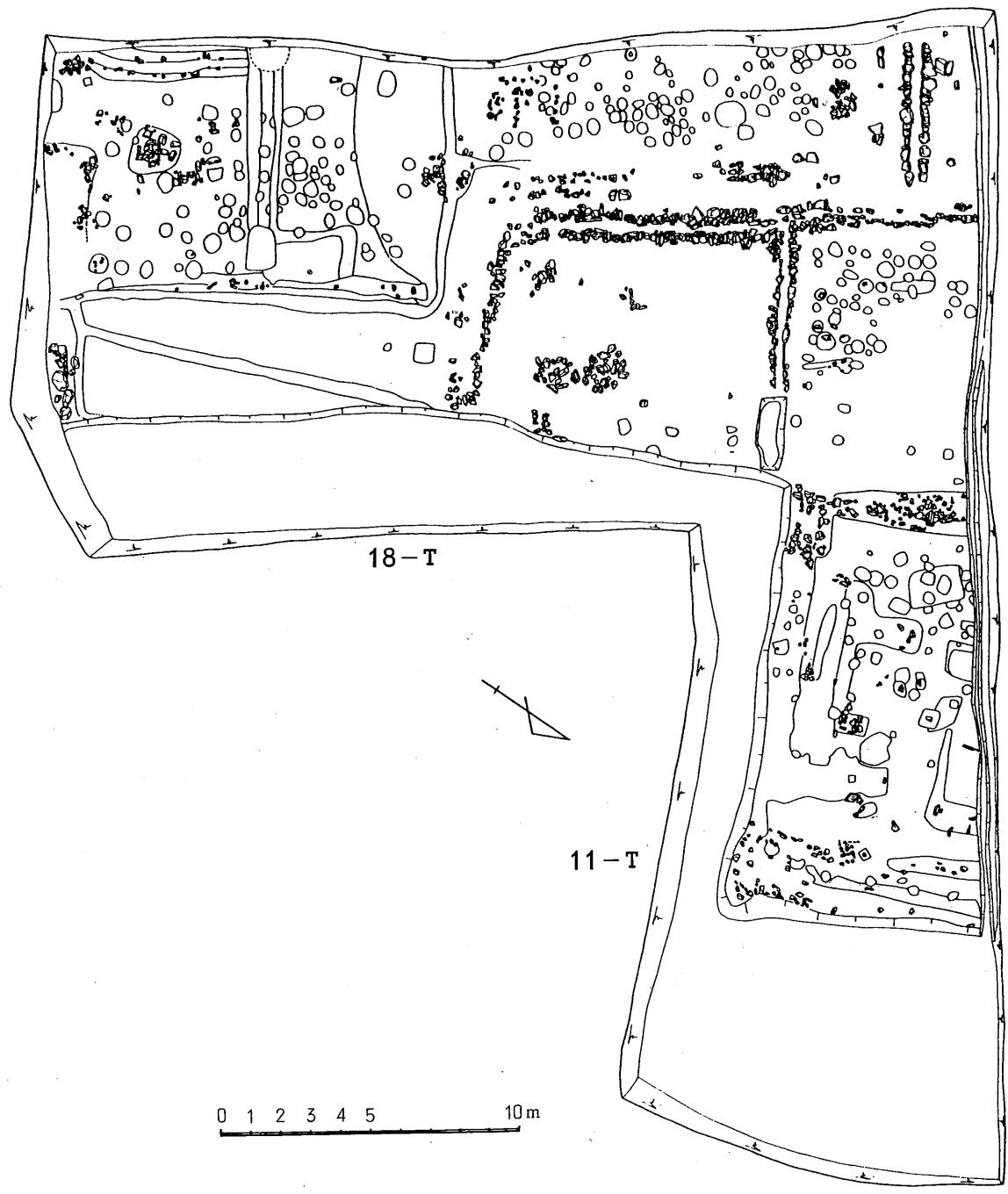
14-T



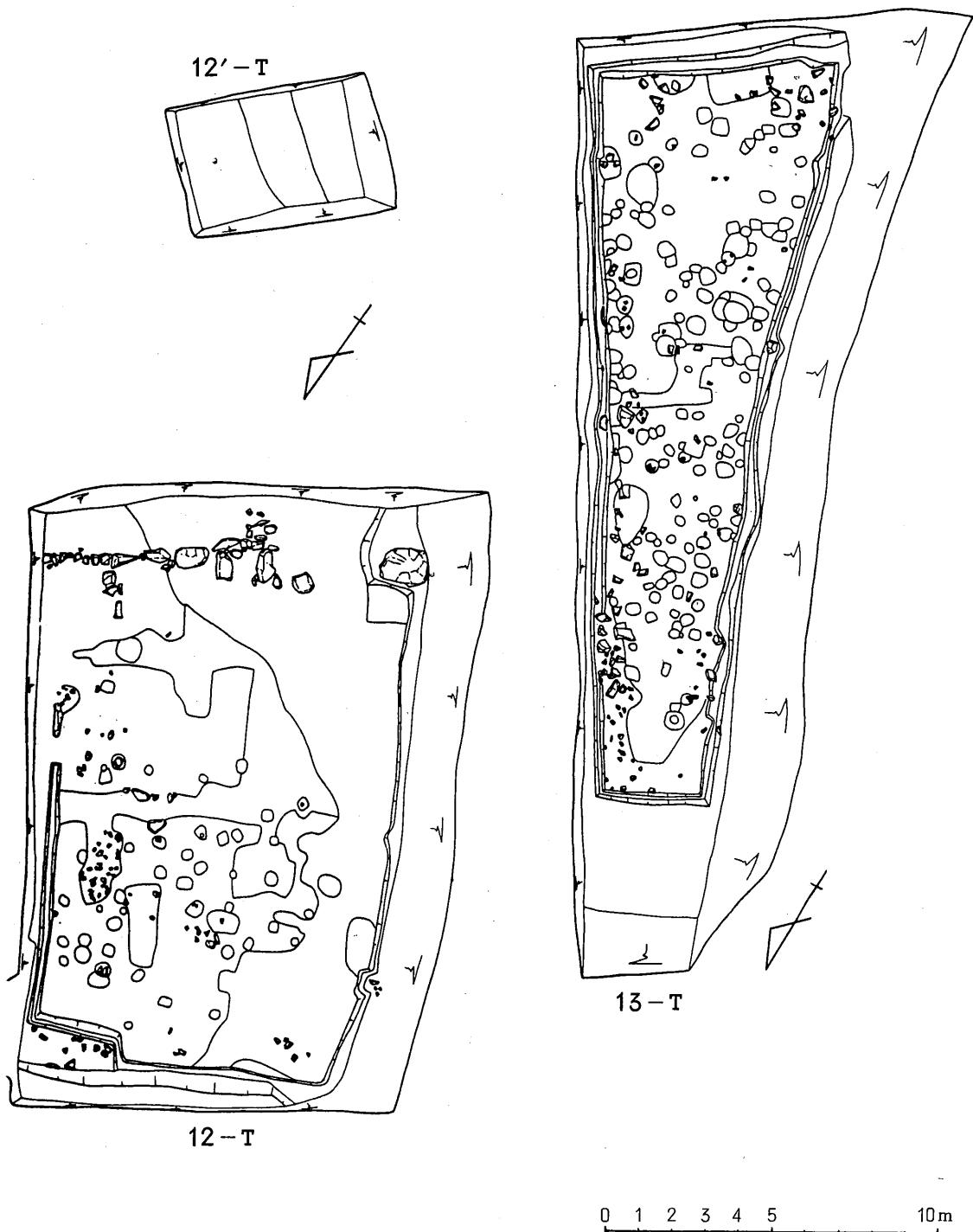
9-T

0 1 2 3 4 5 10m

図版4 9-T・14-T遺構図



図版5 11-T・18-T遺構図



図版6 12'-T・12'-T・13-T遺構図



0 1 2 3 4 5 10 m

図版7 15-T・19-T遺構図



17-T



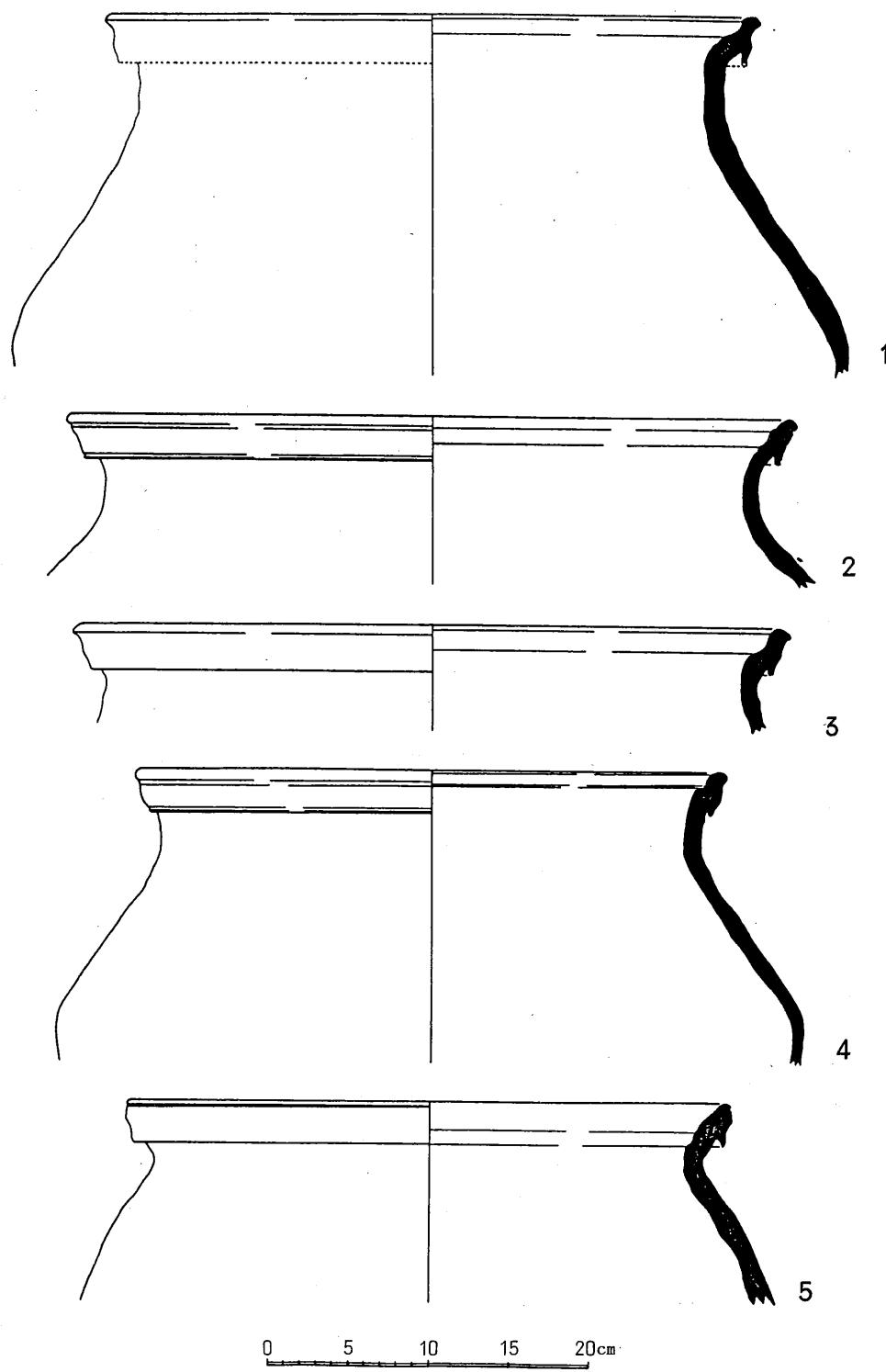
16-T

0 1 2 3 4 5 10m

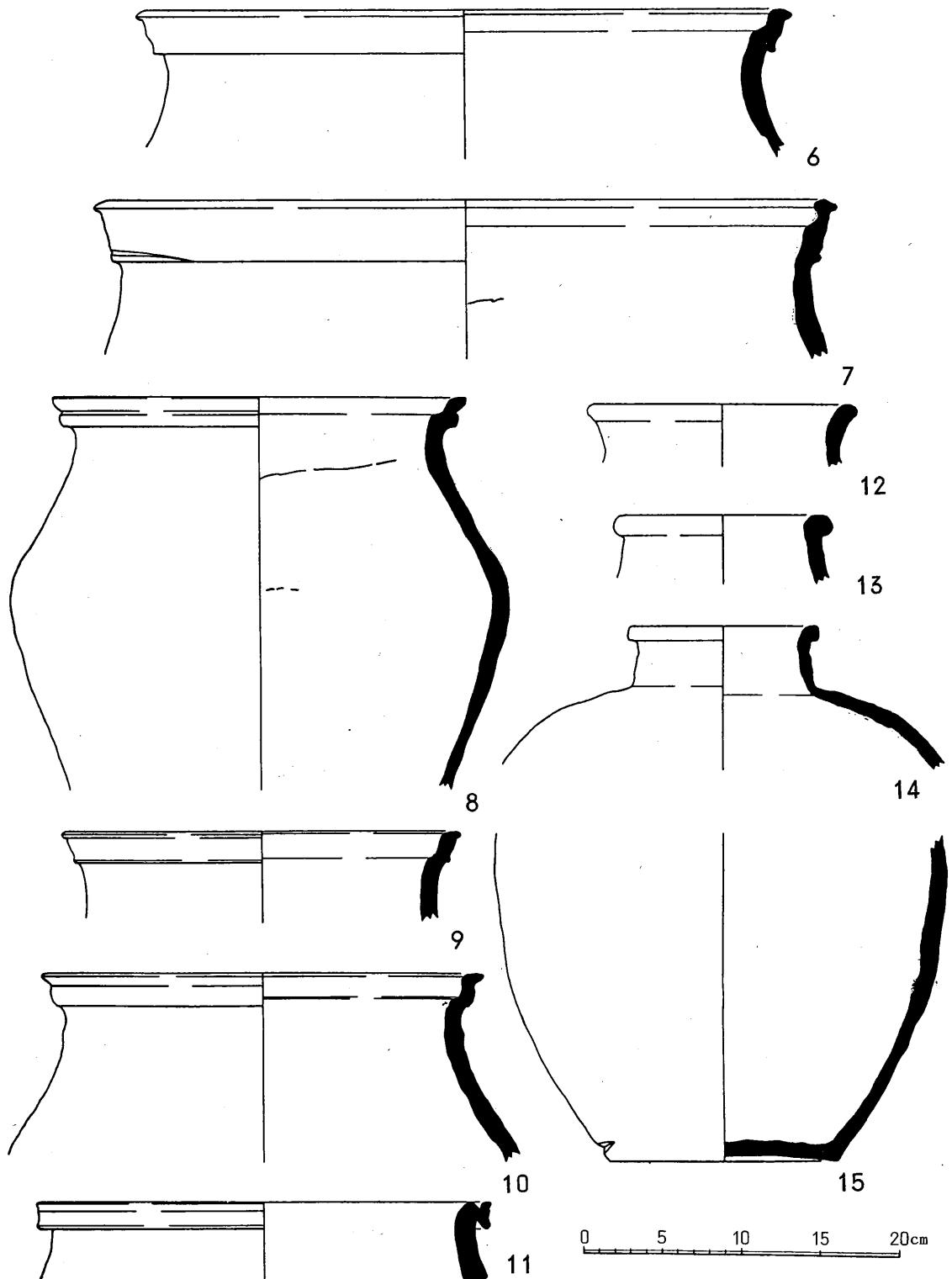
図版8 16-T・17-T遺構図



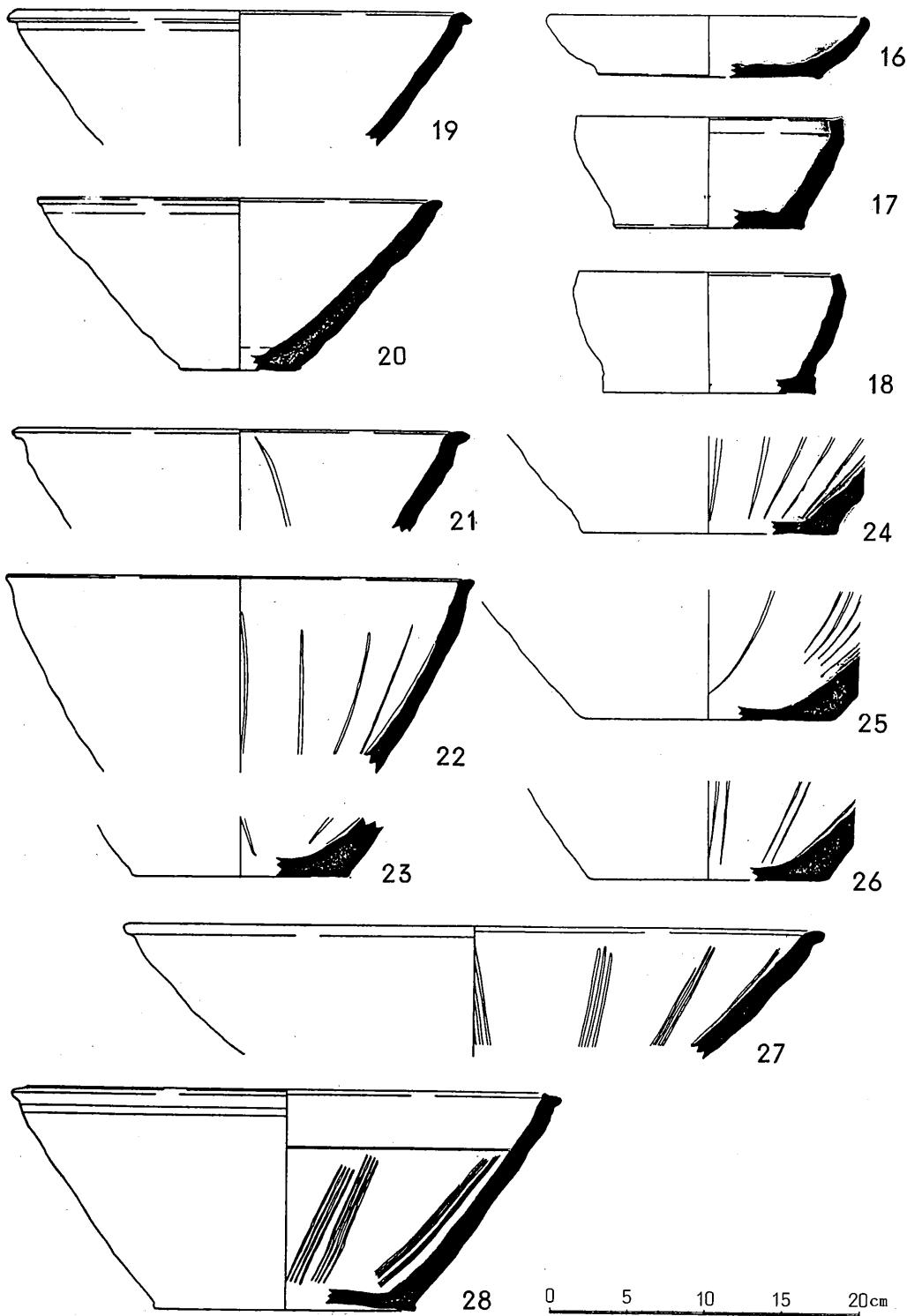
図版9 古屋敷遺跡中世遺構図



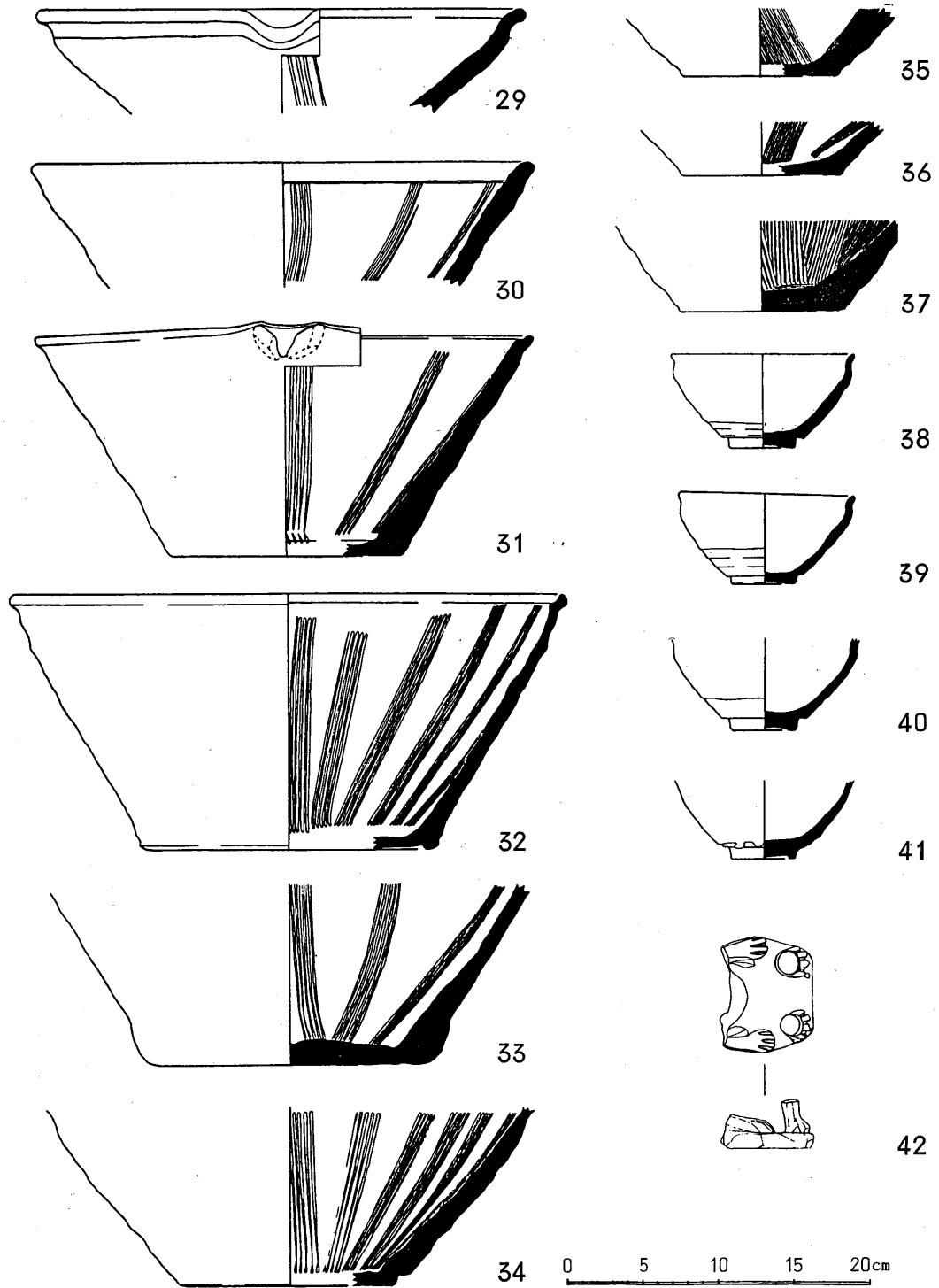
図版 10 古屋敷遺跡出土遺物実測図



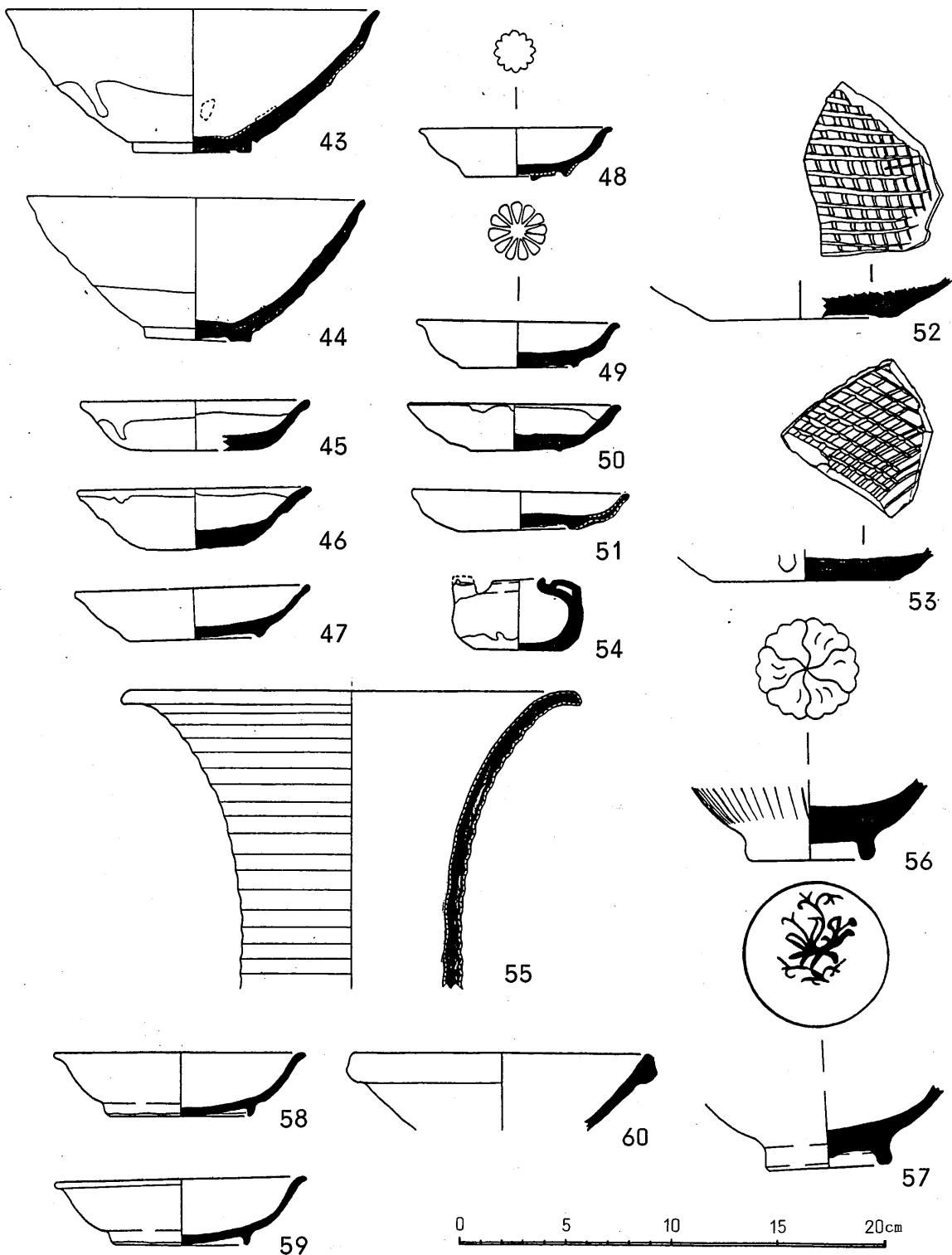
図版 11 古屋敷遺跡出土遺物実測図



図版 12 古屋敷遺跡出土遺物実測図



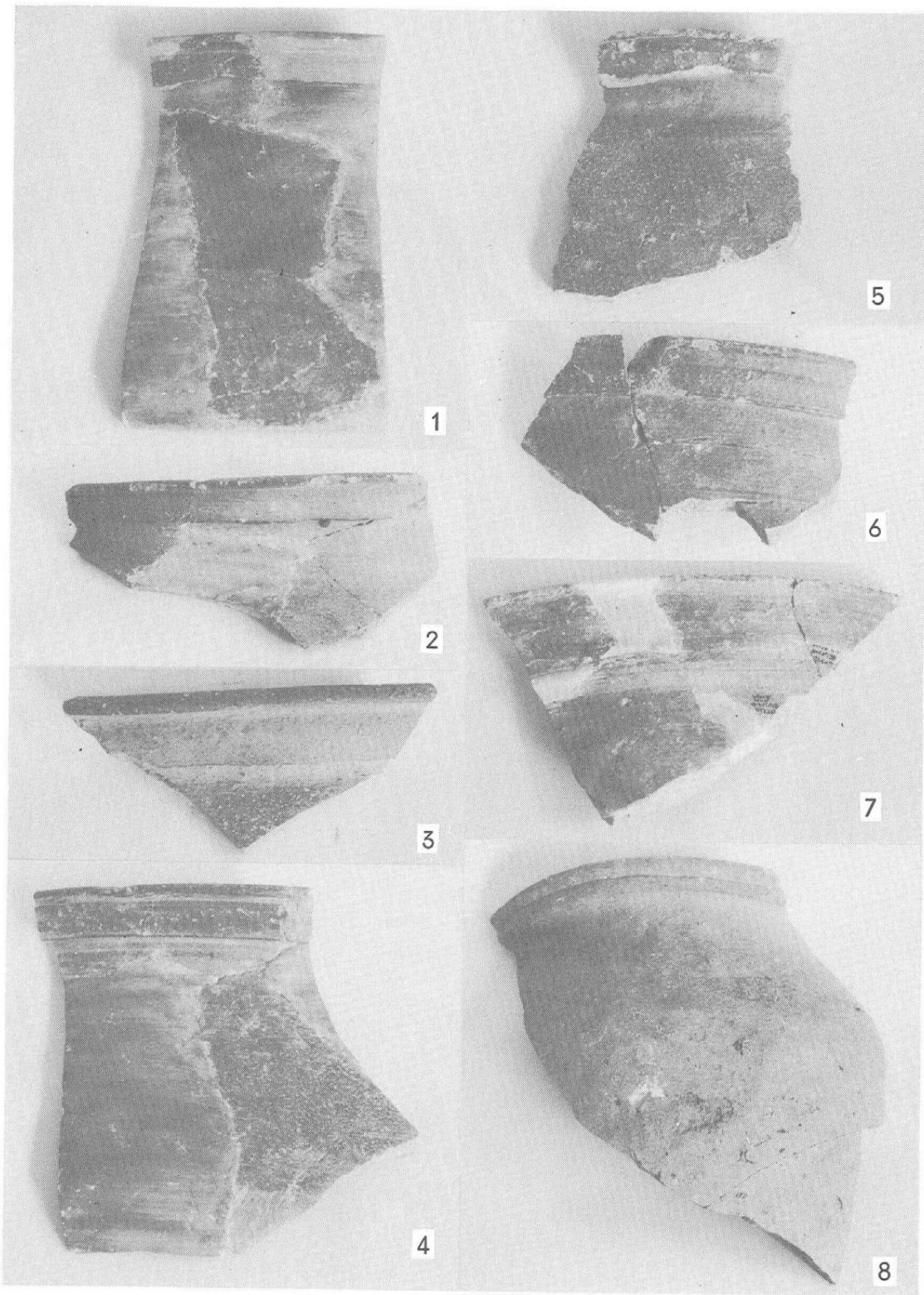
図版 13 古屋敷遺跡出土遺物実測図



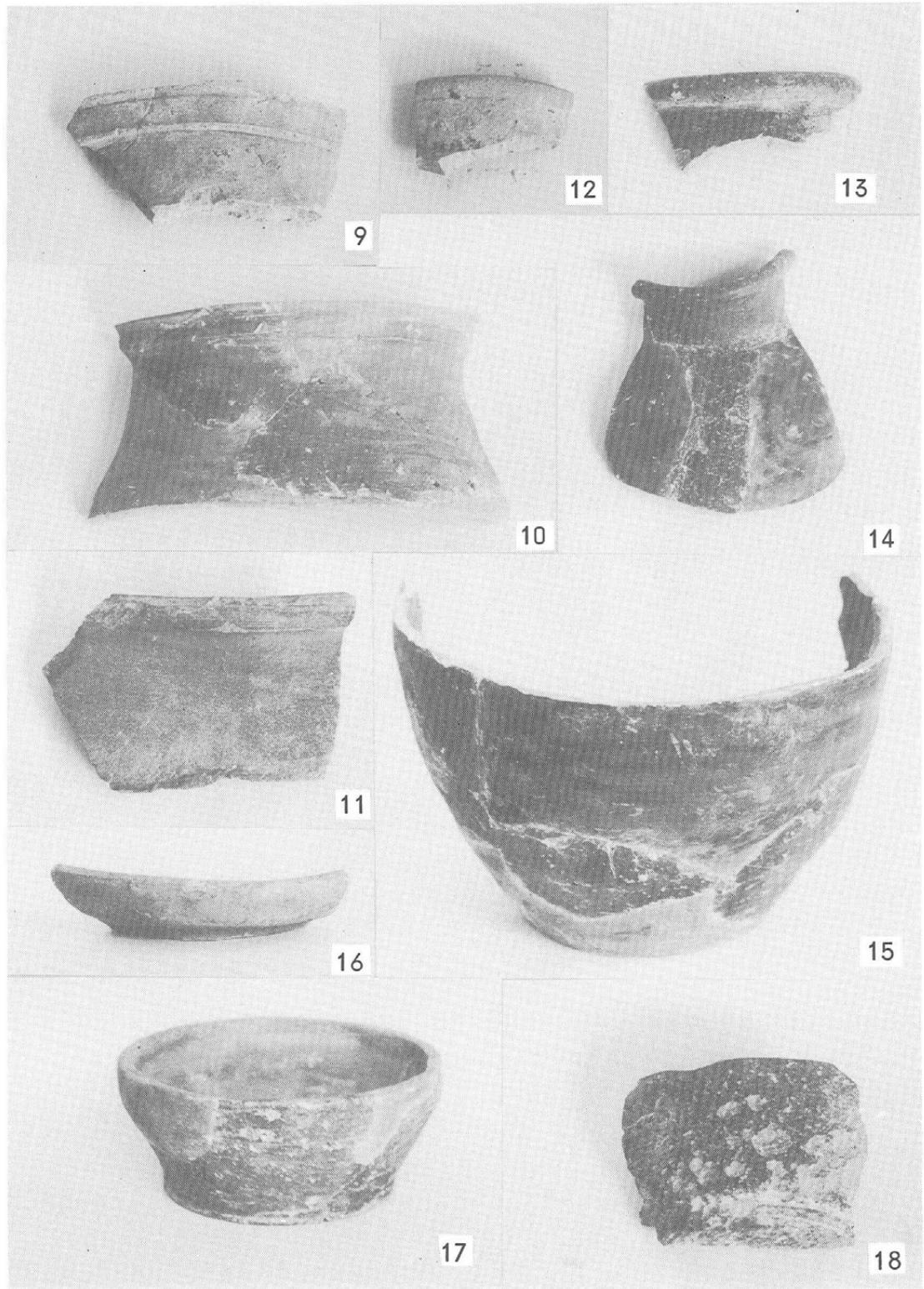
図版 14 古屋敷遺跡出土遺物実測図



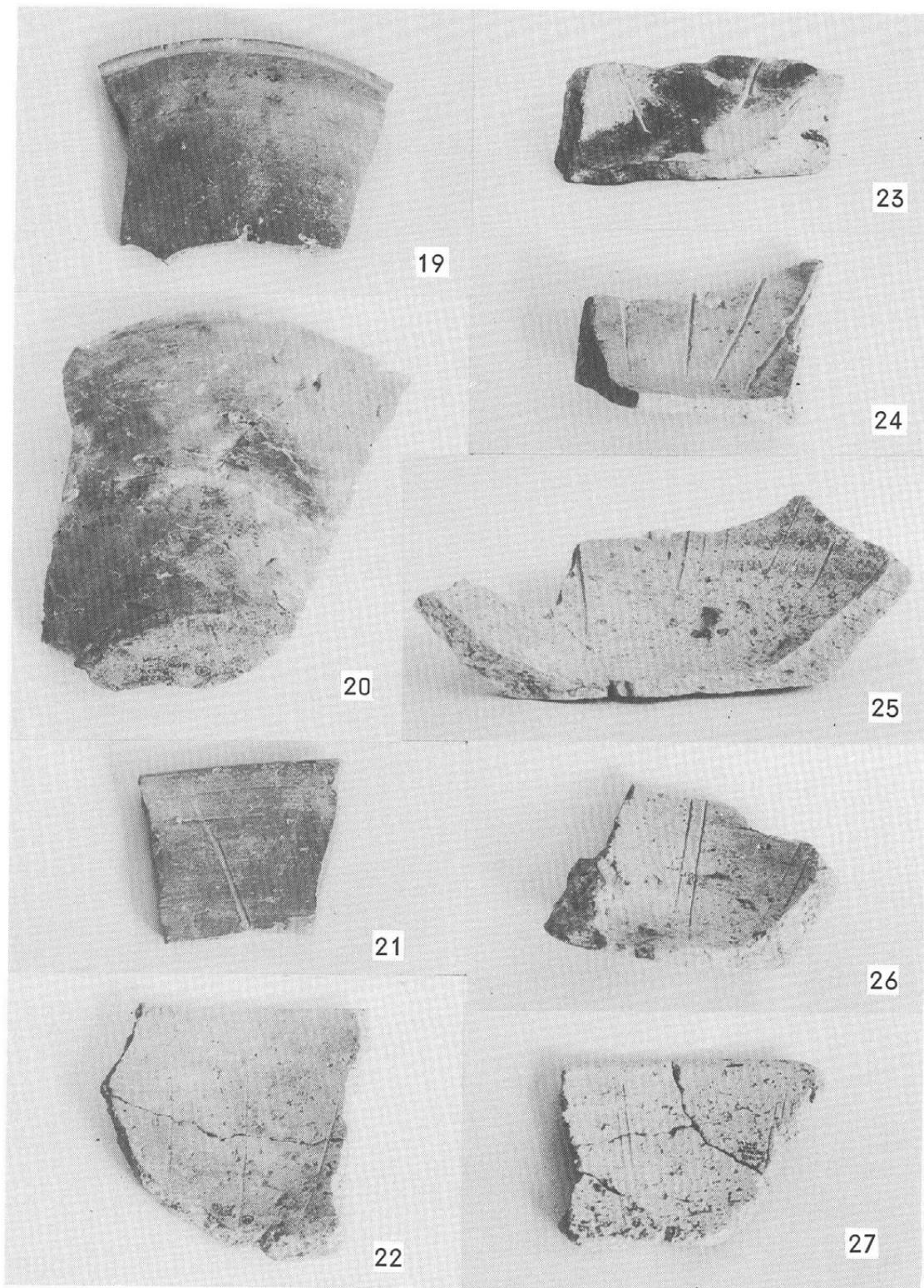
図版 15 古屋敷遺跡出土遺物実測図



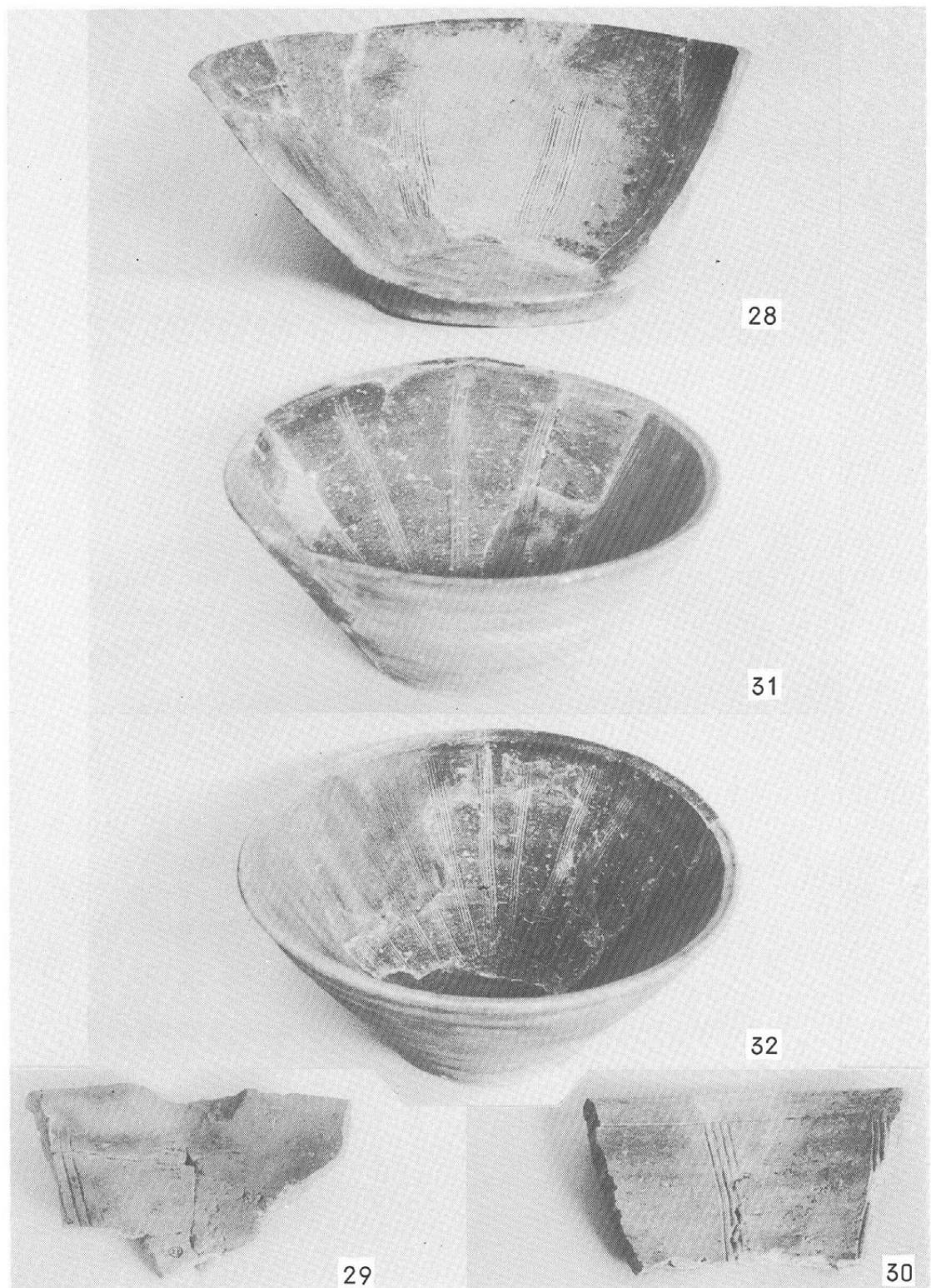
写真図版 1



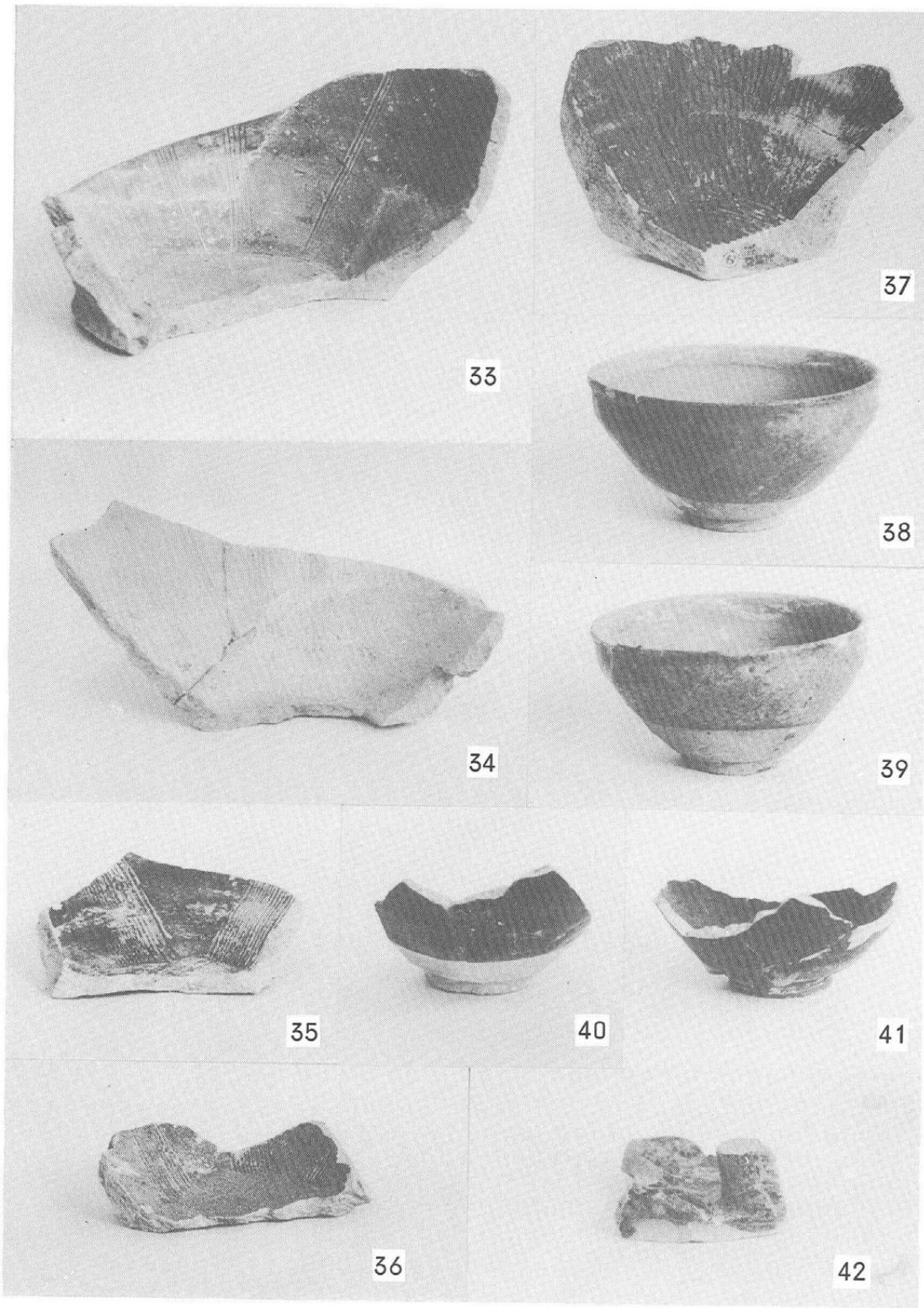
写真図版2



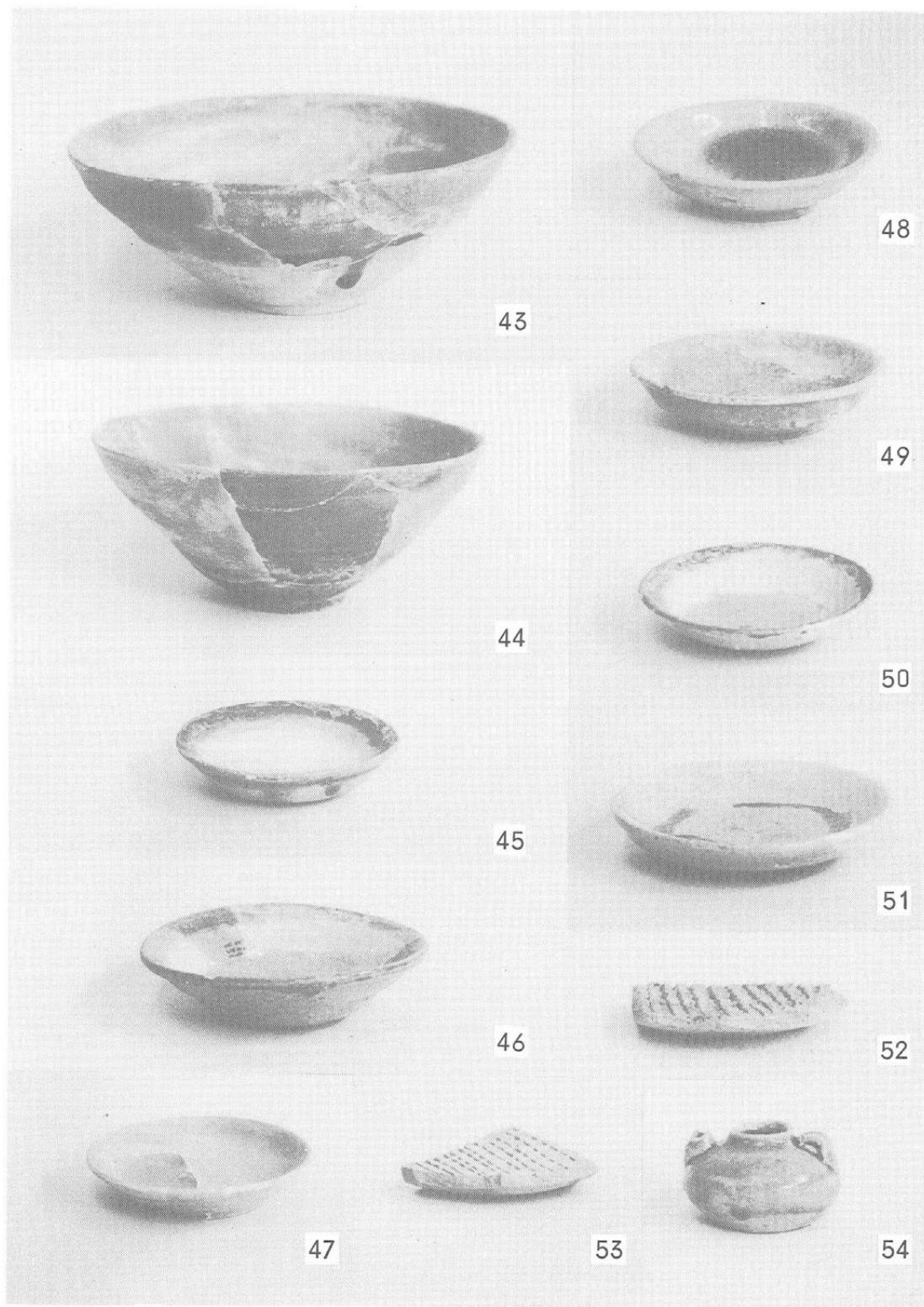
写真図版 3



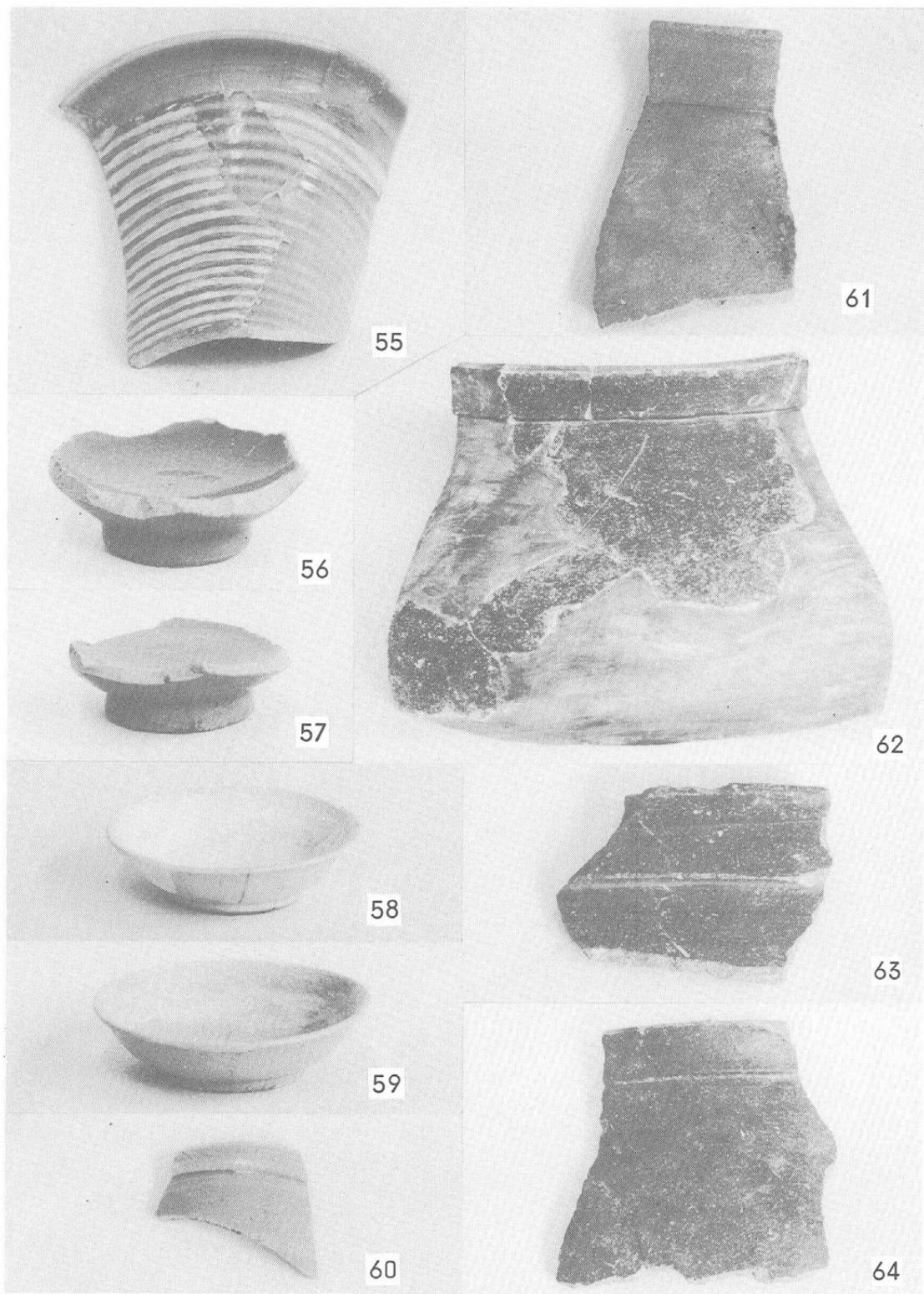
写真図版 4



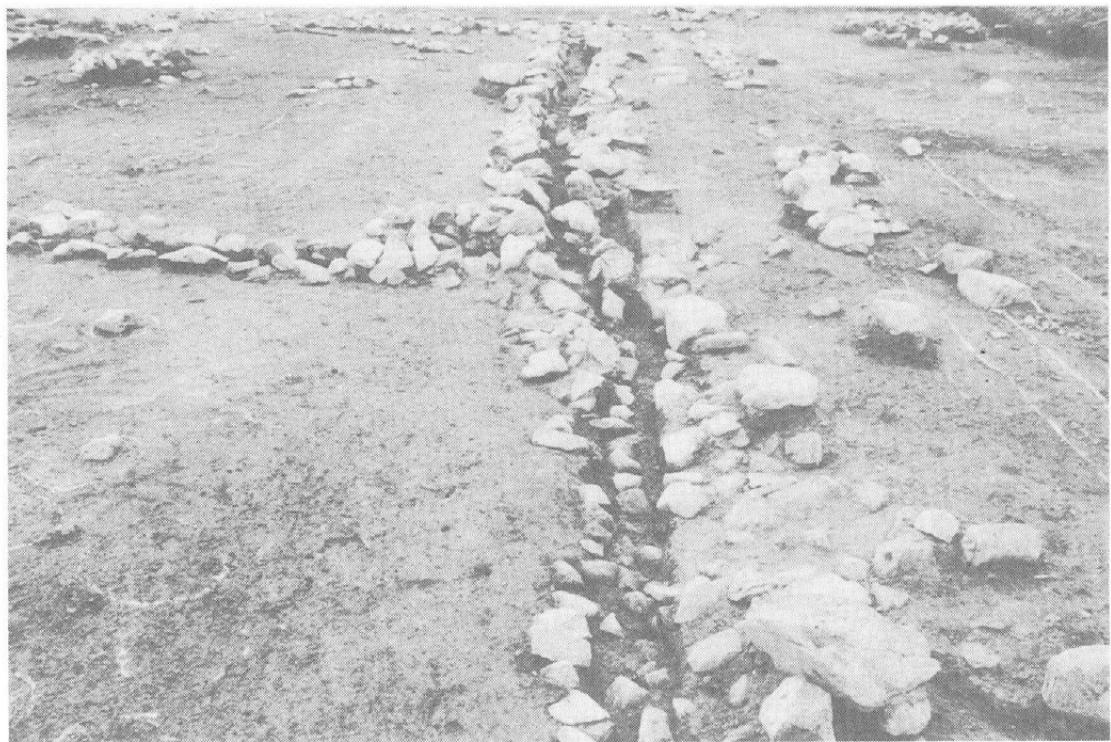
写真図版 5



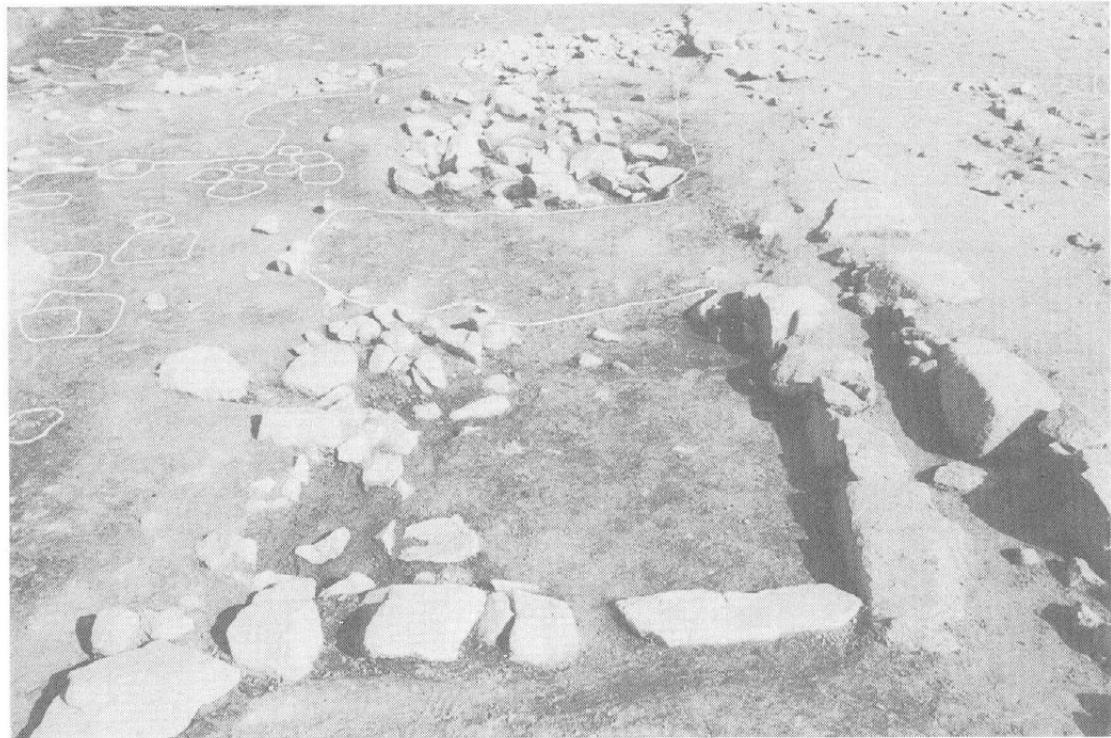
写真図版 6



写真図版 7



18-T 石組溝



写真図版 8

15-T 石組升状遺構



14-T から日夏城跡(伝)を望む



写真図版 9

8-T 石組溝

彦根市埋蔵文化財調査報告第12集  
**古屋敷遺跡発掘調査概要報告書**

1987

編 集 彦根市教育委員会  
発 行 彦根市教育委員会  
印 刷 (有)つくし出版印刷

